

1-4. アドバイザー派遣の実施報告

1-4-1. 利尻富士町産業振興課（北海道利尻富士町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 2,650 人

【面積】 約 106 km²

【地勢】

北海道最北端宗谷岬より南西 62km の海を隔てた日本海の離島、利尻島の北東部に位置し、東西約 11.5km、南北 18.1km で島の 59%を占めている。

【気候、自然】

気象は沿岸一帯を流れる対馬暖流によって受ける影響が極めて大きく、四季を通じての最高気温は約 30 度、最低でも零下 15 度以下になる事はまれで、夏は涼しく冬は積雪も少なく恵まれてはいるが、季節風が他地域にみられないほど強く、典型的な北方離島特有の自然条件下にある。

【歴史】

利尻島は約 1 万 3000 年前の旧石器時代から人が住んでいるといわれており、縄文時代や擦文文化等の遺跡も発見されている。

江戸時代には松前藩によるリシリ場所が開かれ、和人と利尻に住むアイヌとの間で海産物の交易を行っていたと考えられている。また、ロシアの南下に対する警備ため、会津藩士約 250 名が数か月間にわたり利尻島に派遣されたり「日本で最初の英語教師と言われているアメリカの青年、ラナルド・マクドナルドが日本語を覚え通訳になる事を目指し利尻島に上陸した。明治以降、鯨漁や昆布漁を中心とした漁業が盛んになり、東北や日本海沿岸を中心とした各地から多くの人に移住してきたが、昭和 31 年頃から鯨漁が不振となり、これと共に人口の減少が著しく、過疎化と高齢化が進行している状況にある。

【観光】

利尻島は、昭和 49 年 9 月 20 日、全国で 27 番目の国立公園として指定された、「利尻・礼文・サロベツ国立公園」の中に位置している。

島の中心、日本百名山の一つである利尻山を中心に島の周囲に「姫沼」「オタドマリ沼」等の自然景観や高山植物等の観光資源に恵まれているが、観光客の入込は平成 15 年度をピークに年々減少しており、団体旅行から個人旅行に推移していく旅行形態の変化に対応が出来ていなかったものと思われる。

こうした事から、地域資源の掘り起こしによる滞在型観光への転換や、外国人観光客の誘致対策など、町独自の取り組みはもとより、関係自治体等と広域的に連携し、観光施策の展開に取り組んでいる。

【地域資源の概要】

日本百名山の利尻山、日本名水百選の甘露泉水、森林浴の森百選の自然休養林や、山から海岸まで咲く花、クマガラなどの野鳥が生息するなど豊かな自然を抱え、その海で育まれたウニや利尻昆布などの海産物も地域の特産品となっている。また、近世から近現代にかけて行なわれた鯨漁や昆布漁など、当時の記憶を伝える漁業遺産群や歴史・文化等の地域遺産が残されている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

利尻富士町では、1974（昭和 49）年に「利尻・礼文・サロベツ国立公園」に指定された頃から「離島ブーム」が訪れ、日本百名山（利尻山）、日本名水百選（甘露泉水）、森林浴の森百選（自然休養林）といった3つの日本百選に選定された観光資源にも恵まれたことから、旅行代理店等による大型観光バスを使ったマストツーリズムが主流であった。

しかし、平成 15 年以降は減少傾向へと転じ、平成 24 年には観光入込客数がピーク時から 10 万人以上減少した約 15 万人まで落ち込んでいる。他方で、良好な漁場を背景に江戸時代から漁業が盛んに営まれており、自然生態系との関係はもちろんのこと、関連した遺構等の構造物や慣習など文化遺産が数多く残されている。そこで、昨年度からは、利尻（漁業）遺産の価値を明らかにし、観光資源とするための取り組みが実施されている。特に当該地域において、人が自然形態とどのように暮らしを営む仕組みを形成したかを明らかにするため、フェノロジーカレンダーやお宝マップの作成に取り組むなど、利尻遺産の価値を明らかにし、ブランディングに関する取り組みを進めているが、他方で、遺産の価値を生かすツアーの企画力や商品化力、あるいはガイドそのものが不足している状況にある。そのため、利尻遺産を生かすためのエコツーリズムを展開するため、エコツアーの商品化やガイド養成が課題となっている。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 20 日（月）～平成 29 年 3 月 23 日（木）
場 所	北海道利尻郡利尻富士町（利尻島）
ア ド バ イ ザ ー	松田光輝氏（株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長）
参 加 者	計 22 名 利尻富士町観光協会・利尻町観光協会・環境省稚内自然保護官事務所・北海道教育大学・元利尻町立博物館員・(株)ノーザンクロス・利尻富士町教育委員会・利尻富士町地域おこし協力隊・利尻町地域おこし協力隊・利尻富士町役場
スケジュール・方法	<p>【1 日目】 15:30～17:15 利尻富士町役場で講習会・視察に関する打合せ</p> <p>【2 日目】 午前 9:00～12:30 利尻島内視察(一周) 鴛泊～袋間～郷土資料館(車窓)～金崎ウミネコ繁殖地～白い恋人の丘～オタドリ沼～御崎公園～神居海岸パーク(車窓)～杓形岬公園～ポロフンベ集落～旧本泊小学校～富士野園地～鴛泊 午後 講習資料等の作成</p> <p>【3 日目】 9:30～12:30 講習会（場所 利尻富士町総合交流促進施設 りぷら） 移動 利尻富士町出発(15:15)～札幌</p>

(3) アドバイスの内容（講義等）

日本の観光産業は弱い立場にある。日本の人口減少傾向に伴い観光客も減る。今以上にライバルとなる地域が多くなり、海外もライバルとなる。世界遺産等は、自国民より外国人にうける。歴史は資源になる。観光振興を図るうえで、他の地域を知ること大切である。知床の事例を中心に紹介していくが、どこが一番か切り口を見つけると知床より有利になる。

利尻の資源についてきちんと調べて謳っていく必要がある。利尻の資源の有効性を知る。アザラシを見せるツアーは国内では本州の人は喜ぶだろう。世界中からも人気が高いので、利尻でもホエールウォッチングなどの需要は可能性があるかも。サケ・マスの遡上も有効な資源である。利尻が知床より有利なところは、花が売れることである。それは大型の採食動物がいないので植物が保全されているため。見せ方を工夫していくことが大事。

昔、流氷は厄介者であったが、今や流氷観光として位置づけされている。厄介者も切り口を変えると資源となる。

エコツアーガイド収入だけで利尻島で食べていけるのか？日本のエコツアーガイドの収入は平均で200万円前後といわれている。

又、利尻島でも少しずつ上昇傾向にある冬山を活用した「バックカントリースキー」については、1人当たり（2日間）のガイド料単価は5万円以上を取っている。

エコツアーの可能性について考えると、エコツアーが成立する条件として3点あるが、外国人はクオリティの高いものを出せば高いものでも可、外国人の7割は再訪したいと思っており、1番は食、2番は自然の順であるが、残念ながら利尻は情報発信していない、利尻の認知度を上げていかなければならない。

漁業遺産を活用した部分では、昨年度より実施されたと聞いている「昆布の語り部」を行っている会場（現状は廃校となった校舎の一部）を番屋風に似せた空間として見せていくことが良いと思う。

利尻の星空観察ツアーの利潤はどうか。知床は天気が悪ければ動物ウォッチングをする。動物を見ながらだと切り替えていける柔軟性がある。ガイドツアーは安くやらないほうが良い。相場が下がる。単価の安いものをたくさんやっても収益は上がらない。

日本における外国人の受け入れ比率を全体の30%に持っていけないと、日本の人口が減少していることから将来的に厳しくなる。今後、観光が成り立たなくなる。観光を維持していくことはインフラの維持にもつながる。

子供たちは未来の広告塔である。都会へ旅立つ子供たちは地域の広告塔になる。そのためにも地元での自然学習は重要である。

<意見交換>

Q ガイドの紹介に関する問い合わせがよくある。島を訪れる個人旅行者は目的を持った人がほとんどである。実際に知床エコツアーガイドの需要はいつぐらいから確立されてきたのか？

A 20 数年前からである。元々は知床財団で活動していた。その後独立したが最初の5年間は仕事を確保するのに苦労した。旅行会社をうまく活用すべきだが、スタッフの確保が困難だった。ガイド同士が情報を共有し、エリア全体に人を呼び込む手段を考えていかなければならない。現代の情報化社会が進む中では、将来ガイド需要は減るかもしれない。タブレット式ガイドなどが開発されてくれば、現地にガイドが出向かなくてもできる時代も来るだろう。でも、それを逆手にとって対応することも必要である。知床は道内のユーザーが多い。ここが利尻と違うところである。

Q ガイドの収入は？

A 知床の来訪者の構成は、4割団体、4割個人、1割修学旅行、1割社員旅行や同好会等となっており、30代後半のガイドを例にとると年収で500万円程度となっている。

又、各ガイドの評価（参加者のアンケート等）も、給与や賞与の査定に活用しており、それは各ガイドの普段の業務に対するモチベーションに繋がっていくものと考えている。

Q ガイドは地元出身か？

A 地元は自分だけである。

Q 北方領土が返還になった場合、知床の観光の関係について

A 具体的にはわからないが、観光開発はロシアの国内法の関係もあり、難しいのではないかと。あそこには大型の草食動物がいなくて花が豊富だと思う。将来的には利尻・知床のライバルになることも考えられると思う。社会の構造は必ず変わっていく。このままではやっていけないことを地元でも認識していただきたい。これからの強みは自転車（サイクルツーリズム）だと思う。アジア圏の人々は花と景色などの情緒的なものを好み、欧米系はトレッキング、登山、自転車などのアクティビティを好む傾向にある。バードウォッチングも当然有効だと思う。

今後、利尻と知床と連携・情報交換ができる関係になれば良いと思っている。

Q 今後エコツーリズムを推進していく事について重要な事やアドバイスは？

A アドバイスとして、利尻富士町と利尻町と連携してガイド協議会みたいなものを作ったほうが良い。また、リスク対応としてガイドの保険（損害・傷害・賠償）などを各事業者が認識しなければならない。行政支援でやる場合も同様に保険関係をきちんとすること。

利尻富士町役場で講習会・視察に関する打合せ



利尻島内視察（袋間）



利尻島内視察（白い恋人の丘）



講習会（利尻富士町総合交流促進施設りぷら）



(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた。

- ・利尻の資源についてきちんと調べて、その有効性を知ることが大切である。
- ・大型の草食動物がいないことから、花等の植生が保たれているので見せ方を工夫すればよい。
- ・アザラシ、ホエールウォッチング、サケの遡上など有効な資源として考えられる。

今まで課題としていたことがより明確になった

- ・利尻は、キーコンテンツとなる景観へのアクセスが容易であることから、ストーリーが作れない、感動的な瞬間を作れない、他の自然資源が薄れてしまうことがある。今後の導線作りを検討しなければならない。
- ・情報発信をしていない。(まだまだ少ない。)

今までの課題に対して取り組み方がわかった。

- ・流氷のように、厄介者も切り口を変えると観光資源となる。
- ・利尻の認知度を高めるために、情報発信を積極的に行う。
- ・外国人の7割が再訪したいと考えていることから、クオリティの高いものを出していく。

2) 今後、期待される効果

- ・地域に密着した地元ガイドや多様なプログラムへの対応を図ることで、リピーターの獲得や滞在型観光の推進が図られる。

3) 今後の取り組み

- ・滞在型観光への推進を図るため、行政や関係団体、地元ガイド等との連携を充実させる。
- ・行政等が研究した体験メニュー等のプログラム化を地元ガイドとともに進める。併せて、既存のエコツーリズムの磨き上げや、多様な組み合わせにより、他の地域にはない魅力的な資源を作り上げる。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・エコツアーが成功する条件
- ・知床で行われている主なエコツアーとその取り組み
- ・知床が抱える課題とその解決策を探る試行など

2) その他感想

- ・アドバイザーの松田氏の豊富な経験による講習であり、大変参考となった。
- ・滞在型観光を推進するうえで大切な役割を果たすガイドの生計を考慮した提言や、利尻の資源の有効性を今一度考えさせられる有意義な講習であった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

松田 光輝氏 (株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

低標高から自生する高山植物や湿原などの花々を題材としたエコツアーが盛んな地域である。しかし、平成 15 年度をピークに観光客は年々減少傾向にあるとともに、旅行会社が企画する団体旅行から個人旅行に移行しつつある。のべ宿泊人数を増やすため滞在型観光を模索し、新たな観光資源の掘り起こしを推進。昨年度は、北海道教育大学函館校の学生の協力のもと「自然・人と暮らし・産業」などのフェノロジーカレンダーの作成も手掛け、漁業体験活動や漁業遺産を中心に、新たな観光資源の活用を目指している。

②課題

花を素材にしたエコツアーは定着しているが、グリーンシーズンの短い当該地域は、開花期間は短く、エコツアーガイドが収益を得られる期間は 2 カ月程度である。一部のエコツアーガイドは冬期間の利尻山にてバックカントリースキーを行っているが、冬山の知識と山スキーの高いスキルが求められるため、誰でも簡単に習得できる知識・技術ではない。ほとんどのエコツアーガイドは副業を行い、生計を成り立たせているのが現状である。若いエコツアーガイドを定着させるためには、花を素材としたエコツアー以外の開発が喫緊の課題である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- 利尻山と湖沼の景観
- 沿岸で休憩するゴマファザラシ
- 料理設備のある多目的施設 (廃校された小学校)

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- 「海に浮かぶ山」の呼称にふさわしい、優雅な独立峰は見た者すべてに感動を与える景色である。しかし、島の随所から山が見えるため、ストーリー性を持たせた利尻山のコースづくりが必要である。
- 観光客が北海道観光に期待するものは、豊かな自然と野生動物との出会いである。比較的至近距離で安定的に見られる野生動物は、エコツアーの資源としては非常に魅力的である。特に海棲哺乳類を観察できる場所は日本では限られており、有益な観光資源となりうる。
- 自然・文化の魅力を分かり易く伝えるためには、野外におけるエコツアーだけでは限界がある。屋内での展示やレクチャーはそれを補うことができる。また、悪天候時の代替プログラムも実施可能なため、滞在型観光を推進するためには有利となる。調理設備もあるため、食文化や地域産業を絡めたプログラム作りにも活用ができる。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ 利尻島における資源を用いたエコツアーの可能性（優位性のある資源）
- ・ 利用方法・利用者をコントロールしつつ、魅力を高めるための方策（例：利用調整制度による知床五湖の取組等）
- ・ 漁業遺産活用の可能性と課題
- ・ リピーター獲得の必要性和エコツアーガイド（職業として）の収入の安定化の必要性
- ・ 体験施設の活用方法と施設内の演出方法

4) エコツーリズム推進全体構想への取り組み状況・意向について

①全体構想への取組状況について

具体的な取り組みはなく、全体構想についての知見もあまりない。

②全体構想策定への意向について

将来的に取り組む可能性はあるが、現時点ではその段階ではない。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

利尻島におけるエコツーリズムの広域連携。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

資源性の高い地域ではあるので、今後、外国人観光客も含めエコツアーを推進するには有利な地域だと思われる。島へのアクセスが限定され誘客には不利な要素もあるので、滞在日数を如何に延ばすかが重要になる。そのためには、新たな散策ルートの整備や地域産業も絡めたプログラム作りが必要となる。現在ある漁業遺産を活用するためにも、早急な保存・整備を行わなければならない。しかし、漁業遺産だけで誘客することは難しいと考えられ、食に結びつけることが重要だと思われる。漁業遺産をよりリアルに感じてもらうためには、現地ならではの食も体験させることをお勧めしたい。

また、漁業遺産は島内に点在しているため、移動手段の確保が必要となり「白タク問題」がある。解決策としては、エコツーリズム推進全体構想の認定を受けることが法的解決手段となるので、検討することをお勧めする。全体構想の作成は、まだ、不十分なエコツーリズムの推進組織体制の構築や島内の連携、エコツアーガイド同士の連携体制の確立にも寄与する。観光客に魅力ある地域として感じてもらうためには、隣接する利尻町や礼文島と一体となった推進体制が望ましいと思うので、行政区を越えた取り組みに期待したい。

1-4-2. 山田町体験観光推進協議会（岩手県山田町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】16,204人（平成28年11月1日現在）

【面積】263.45 km²

【地勢】

岩手県下閉伊郡山田町は、岩手県の沿岸部陸中海岸のほぼ中央に位置する。町の北部は宮古市、西部から南部にかけては大槌町に隣接し、東部は太平洋に面している。東部は北上山地が太平洋に沈降する典型的なリアス式海岸である。山田湾と船越湾の二つの湾を擁している。一部地域は三陸復興国立公園に指定されており、壁岩、磯、赤等の海岸性原生自然の景観に優れ、学術的にも価値が高い。

また、豊かな漁業資源に恵まれており、波が静かな山田湾と船越湾は好漁場・漁港となっている。かき、イカ、アワビ、ウニ、ホタテ、ワカメ、サケ等を収穫する水産業が盛んである。山田湾に広がる養殖筏の風景は山田町のシンボルであり、三陸らしい地域景観である。

【気候、自然】

気温は8月が最も暖かく、2月が最も寒い。降水量は9月が最も多く、2月が最も少ない。海流（親潮、黒潮）の影響を受け、県内陸部と比較して冬期は暖かく夏期は涼しい。

夏期はやませ（山瀬）と呼ばれる冷涼・湿潤な風の影響で急激に気温、見通しが低下することがある。年間平均気温10.3℃、年間平均降水量1,513mmである。

【歴史】

現在の山田町は、1955年（昭和30年）の町村合併により誕生した。また、同年、三陸一帯が陸中海岸国立公園（現・三陸復興国立公園）に指定され、山田町も、船越半島をはじめとする地域が国立公園地域に指定された。

過去に、明治三陸大津波、昭和三陸大津波、チリ地震津波、東日本大震災等の大規模災害を経験している。かつて、商業捕鯨が盛んであったが、1987年に国際捕鯨委員会（IWC）の規制により幕を閉じている。

1643年、オランダ船ブレスケンス号が山田湾に入港。水、食料、野菜を補給するために入港した船員に町の人々は温かくもてなした。それがきっかけで350年を経た平成5年にオランダ王国との文化交流が始まり、ユース年代を迎えてのサッカー交流や、オーケストラの公演など、まさにヨーロッパの香りが届けられてきた。なお、そのような史実により、山田湾内に浮かぶ島をオランダ島と命名している。

【観光】

震災前は、山田町観光協会を中心に、地元の漁業や海の自然美を活かしたあさりまつり、山田の鮭まつり等のイベントのほか、海上漁業体験・海岸美探勝、陸上漁業体験、季節毎の特色を活かした体験を提供してきた。また、鯨と海の科学館でのムラサキガイのアクセサリーづくりや海藻しおりづくり、木村商店でのいか徳利づくり等、気軽に参加できる体験プログラムも提供されてきた。

東日本大震災により観光関係の施設的全壊・流失等の被害を受け、多くの体験企画は提供できない状

況にあるが、関係者の努力により、復興が進められている。

町内の宿泊施設の宿泊容量は一般観光客の利用が想定されない「その他」の2施設を除外すると、実質的な宿泊容量は、総部屋数162室、総宿泊可能386名である。

【地域資源の概要】

山田湾、オランダ島、大釜崎、赤平金剛等リアス式海岸の自然景観、「鯨と海の科学館」や「船越家族旅行村」、「道の駅やまだ」「復興かき小屋」「観光物産館とつと」等の観光施設がある。

●アドバイザー派遣の背景・これまでの取り組み

《背景》

山田町では、平成27年度まで環境省における復興エコツーリズム事業および「山田町観光復興ビジョン策定」にて、町民による検討会を積み重ね、町の体験観光のあり方、推進方法等を検討してきた。

その検討内容や要望、ビジョンを実現・実施するために、町では平成28年度、体験観光コーディネーターの育成と体験観光を推進するための「山田町体験観光推進協議会」を設立した。現在、体験観光コーディネーターの人材育成と体制の基盤づくりに取り組んでいる。

同時に、体験観光コーディネーターが町内事業者（ガイドを含む）の連携・情報共有、町外の方々（旅行エージェントやお客様）とのマッチング、情報発信、体験プログラム開発・スキルアップを進めていくためには、町内の各関係者の育成・研修も最優先事項となっている。

《地域課題》

- エコツーリズム検討会や観光復興ビジョン策定において、商業関係者の参加がほとんどなく、復興途中の商店街の巻き込みができていない。
- 役場内では、観光担当課（水産商工課）においては観光推進の重要性を認識していたが、庁内全体では共有されていない。
- 震災前まで観光客の受け入れを積極的に行っていなかった町であるため、町民の体験観光における「もてなし」のスキルが低い（どうすればいいのかわからない）。
- 体験プログラムの内容と本数が少ない。
- 他地域のことを参考にしたり勉強したいが、仕事を持っている事業者には、先進地視察は負担が大きすぎる。

《申請目的》

町内事業者向けの育成・研修のひとつとして、アドバイザーのお力を借りて、町民および行政の体験観光の意義、意識向上、おもてなしの基本、ガイドスキルの向上等を図りたい。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日	時	平成 29 年 3 月 2 日 (木) ～平成 29 年 3 月 5 日 (日)
場	所	山田町まちなか交流施設
ア	ド	バ
イ	ザ	江崎貴久氏 (株式会社オズ 代表取締役)
者	者	計 19 名 <ul style="list-style-type: none"> ・山田町体験観光コーディネーター ・マリン・ツーリズム山田 会員漁師 ・新生やまだ商店街 震災語り部 ・一般社団法人山田町観光協会 ・地元ガイド希望者 ・商工会 (本部、女性部、青年部) ・山田町役場職員 ・山田町町議会議員 他
スケジュール・方法		<p>【1 日目】 15 時 宮古駅にてお出迎え後、山田町へ 16 時 30 分 山田町役場到着、役場内案内後、講演会会場案内 18 時～ 副町長との会談 19 時～ 打ち合わせ</p> <p>【2 日目】 9 時～10 時 30 分 講演会「交流人口増加に、自分たちもなにかできる！」 ①～観光客を呼び込む町の活性化のアイデア～ 11 時～14 時 昼食 (四季海郷)、打ち合わせ等 14 時 30 分～16 時 講演会 「なぜいま町をあげて観光を推進することが必要なのか」 18 時 30 分～20 時 講演会「交流人口増加に、自分たちもなにかできる！」 ②～観光客を呼び込む町の活性化のアイデア～</p> <p>【3 日目】 10 時～12 時 講習会「体験観光で山田町をもっと楽しく」 ～体験観光とは？ 体験プログラムの作り方とは？～ 12 時 30 分～13 時 30 分 昼食 (釜揚げ屋) 14 時～17 時 講習会「おもてなし講習」 18 時～23 時 交流会 (竹松や)</p> <p>【4 日目】 9 時～10 時 町内視察後 (道の駅やまだ、漁師作業場)、山田町発 11 時 宮古駅にてお見送り ※講演・講習会は、すべて山田町まちなか交流センターにて行った ※①と②は同じ内容 (商業者によって参加しやすい時間帯が異なるため)</p>

(3) アドバイスの内容（議事録）

●講演会「交流人口増加に、自分たちもなにかできる！」

～観光客を呼び込む町の活性化のアイデア～

《内容》震災から6年が経ち、ようやく本設の商店が少しずつ立ち始めたなかで、新しい町ができてソフトや外からの人の受け入れの工夫・努力をしなければ、シャッター街になってしまう。鳥羽の実例を教わりながら、山田町でできることのヒントをいただいた。

《主な参加者》商店街店主、観光協会職員、商工会、まちづくり会社、道の駅やまだ、水産商工課等
参加者：2回合計32名

- ・観光で地域が潤う仕組みづくりと連携づくり
- ・地域の魅力が伝わる自分たちならではの手法
- ・ツアー以外での経済効果
- ・鳥羽市の漁観連携について
- ・観光が地元民とお客様を結ぶ
- ・島っこガイドの話 等々

●講演会「なぜいま町をあげて観光を推進することが必要なのか」

《内容》観光を町全体で推進するにあたり、行政、各団体とその重要性についての共有をするため、観光が町に及ぼす波及効果や鳥羽市での取り組みを講演していただいた。

《主な参加者》山田町役場、観光協会、商工会、商工会青年部、道の駅やまだ、一般等
参加者：計19名

- ・行政の役割と民間事業者の役割（ベクトルを同じにする）
- ・山田町にしかできないこととは（江崎氏が視察で見た山田の資源を例に）
- ・鳥羽市と山田町の比較
- ・観光で地域が潤う仕組みづくりと連携づくり
- ・観光資源化のプロセス
- ・鳥羽市の漁観連携について
- ・観光協会によるふるさと納税について

●講習会「体験観光で山田町をもっと楽しく」

～体験観光とは？ 体験プログラムの作り方とは？～

《内容》現在体験観光に関わっている人、または今後関わる可能性のある人を対象にした、体験観光プログラムの効果や手法など、より実践的な内容を、ワークショップ形式で行った。

《主な参加者》観光協会、マリン・ツーリズム山田会員漁師、白石集落農業生産組合、宿泊施設、道の駅やまだ、水産商工課、商工会、一般等
参加者：計19名

- ・観光とは
- ・海島遊民くらの体験プログラムと島っこガイドの動画
- ・ガイドの総合力とは
- ・グループワーク「自分のポジショニング。マーケティングは、ガイド自身の分析から」
- ・グループワーク「山田町の資源分析」
- ・グループワーク「プログラムをつくろう」（テーマは「やませ」と「帆っ立て小屋」）
ストーリー展開と地域への効果

●講習会「おもてなし講習」

《目的》現在体験観光に関わっている人を対象に、体験観光において必要な「おもてなし」やガイドの仕方の講習会の予定だったが、午前中の講習会とメンバーがほぼ同じだったため、午前中の続きを行い、「おもてなし」は、ガイドの立ち位置など、具体的なスキルを教わった。

《主な参加者》観光協会、マリン・ツーリズム山田会員漁師、宿泊施設、道の駅やまだ、水産商工課、一般等、参加者：計13名

- ・グループワーク「プログラムをつくろう」（テーマは「やませ」と「帆っ立て小屋」）
ストーリー展開と地域への効果
- ・ガイドスキル講習



(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・鳥羽市という山田町と主幹産業が同じである地域の資源・人を活用した観光推進の実例を聞き、いままで観光に興味をもたなかった人たちの興味を引いただけでなく、具体的に何かしようという意欲も出てきた。
- ・講演・講習内容を細かく分け、時間帯も精査したことで（回数は多くなったが）、聴講・受講してほしい層が参加しやすくなり、また、いままで観光系の講演会に参加しなかった商業者も参加。町内の幅広い業種、層と「観光推進」について共有できた。
- ・なによりも、江崎氏のバイタリティと人柄に町民が惹きつけられ、やる気が出たようだ。
- ・プロの目から見た山田町の魅力を知り、町の魅力の見直し、アピールするためのヒントを得られた。

2) 今後、期待される効果

- ・行政と民間連携による体験観光の推進に拍車がかかる
- ・商業者による体験観光（コーディネーター）への協力
- ・ガイドや体験観光受け入れ事業者の増加

3) 今後の取り組み

- ・体験観光を活用した、復興する街中（商店街）への具体的な誘客活動
（まち歩きツアーや漁業と連携したプログラムの開発）
- ・現在行われている体験プログラムのスキルアップと、より誘客できるプログラムの開発
- ・体験観光のコーディネーターおよびガイドの育成
- ・民泊（農家・漁家）事業の開始（震災の影響で町内の宿泊施設が足りないため）
- ・鳥羽市のような漁観連携づくり
- ・教育旅行等団体客の受け入れ
- ・ジオパーク、潮風トレイルを生かしたツアーづくり

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・体験観光の経済波及効果
- ・鳥羽市で江崎氏が行っている取り組み
- ・講師から見た山田町の地域素材の魅力

2) その他感想

- ・以前町内の視察はひととおり行っていただいていたので、今回は 2 日間でより多くの人に講師の話を聞いてもらいたいと、講演・講習会を 5 回もやっていただいた。江崎氏には無理をお願いしてしまっただが、町民の満足度は高く、山田町にとってとても有意義な 2 日間となった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

江崎 貴久氏 (株式会社 代表取締役 江崎 貴久)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組と課題

山田町行政の中に観光行政が立ち上がり、「山田町観光復興ビジョン・やまだプライド」が発行された。行政においても、現場においても、その位置づけが岐路である。

これまで、いくつかの体験プログラムや震災復興語り部ガイドの取り組みを実施している。震災前からの取り組みが、震災によって休止しているものもあり、無理に推し進めるのではなく、町民が取り組める方法を模索しながら行く必要がある。一方、これは、行政にも言えることであり、震災復興の仕事が膨大にあるため、民間活力がとて期待される。動きやすい環境づくりは、住民のチームによる少し軽い気持ちでできる取り組みが重要である。やまだくじら大学は、そういった必要性の中でゆっくりと形成されてきたもので、周りからの理解とサポートが重要である。他の地域でこうした取り組みがある場合、勢いとモチベーションに期待をかけることで成長する。しかし、この地域では、あえてプレッシャーにならないスピードと存在の理解が重要である点から、この団体の位置づけは山田町ならではの工夫なのである。今後も、外からの刺激を入れる場合には、このデリケートな宝物に対し、地方創生や観光振興のための企業化や組織化の型にはめてしまうことで壊してしまうことがないようにしていただきたい。

また、カキ・ホタテ養殖事業者の体験プログラムや飲食店の商品開発・カヤックツアー・いか徳利づくり体験など、新たに進みだした体験プログラムについてはそれによる効果の実感とともに、次のステップの必要性が感じられている。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

②上記地域資源に魅力を感じた理由

【地形】山田湾は、湾口が非常に狭く、周囲を広範囲で半島に囲まれている地形そのものがおもしろい。それによる自然環境の特徴も、エコツーリズムをする上で強みとなることが考えられる。特に三陸のこの季節にもかかわらず、比較的波が穏やかであることは、体験プログラム実施において、想定以上の催行率が期待できると思われる。

【ホタテ】湾の特性を生かしたカキとホタテの養殖が盛んにおこなわれている。カキ小屋の取り組みが行われているが、三陸エリアでは山田町は先進地となっているものの、現在日本全国でカキ小屋が流行しており、全国の観光客をターゲットにするにはカキ小屋の場合は競合が多い。よって、移動2時間圏内程度のエリアはターゲットにしやすいと考える。

それに比べ、ホタテは、同じくらい盛んに養殖されている割には、地元注目度が低い。その理由は、「ホタテは、北海道や青森の方が盛んだから。」「北海道や青森のイメージだから。」というものであった。一次産業との連携については、その規模や形態によって観光での活用方法を変化させなければならない。北海道や青森は、ホタテの生産量も圧倒的であり、観光との連携の場合は量産能力による観光との連携が外せない。逆に言えば、量産しているからこそできない対応がある。ホタテは、消費者の許容範囲も広く、形状も女性には特に好印象である。実際の首都圏での物産展などに参加した実績によれば、

一番売れていたものはホタテであったとの報告を JTBF よりもらっている。山田町のホタテの生産量が多くないからこそ、細かなプログラム構成と他ではできないプロモーションにもつながる可能性が高いと考える。

【牡蠣養殖】震災前の写真では湾の大きさに対してカキイカダが多すぎるのではないかと感じた。しかし、震災後、カキイカダが減少しており、生産力としてはマイナスに見えるが、1個当たりの牡蠣に対する栄養分を考えた場合、品質が上がっているのではないかと考えられるからである。しかし、マイナスをプラスにしていくために、カキ養殖業者がカキ養殖の圃場管理をどう考えていくのかによって、エコツーリズムのメッセージ性が考えられる。

【やませ】三陸で有名な自然現象である「やませ」は壮大な自然を感じることができる。画像と動画を見ただけでも、圧倒的な自然の威力を感じ感動を覚えた。しかし、住民の認知度は低く、知っている住民でも昔からの厄介者としての印象である。夏の暑さの中、一転する気温の変化、視界の変化は、住民にとっての日常が観光客にとっては非日常として感動をもたらすことができる。全国に雲海の事例があるが、いつも見えるわけではなく、「見えるかもしれない」というだけで人が訪れている。視覚的な印象が強いこの自然現象は、ぜひ、様々な方法で活用していただきたい。

3) アドバイス（講義等）の概要

3月3日（金） 9時～10時30分 山田町まちなか交流センター

「交流人口増加に、自分たちもなにかできる」①～観光客を呼び込む町の活性化のアイデア～

対象：飲食店、商工会会員、商工会青年部、商店街、グループ補助金事業者、一般

対象が一般的で広いため、同じような漁村での観光として想像できるよう比較しながら、エコツーリズムの基本的な考え方を実話に基づき紹介した。自分たちが魅力的に感じていないモノやコトの中に、たくさん大切な光があるということと、その光らせ方には一人一人の自分なりの方法が重要であることを伝えた。また、漁村であり、自然の活用が生活と密着しているからこそ、「活用されていない自然資源」ではなく「活用されている自然資源」の違った側面からの活用としてレクチャーを行った。

また、地域への良い効果を意識して、何かの活動を行うことが、具体的な効果を生むことを伝えた。面識のない方もいらしたが、次第に笑顔が出始めたことに手ごたえを感じた。

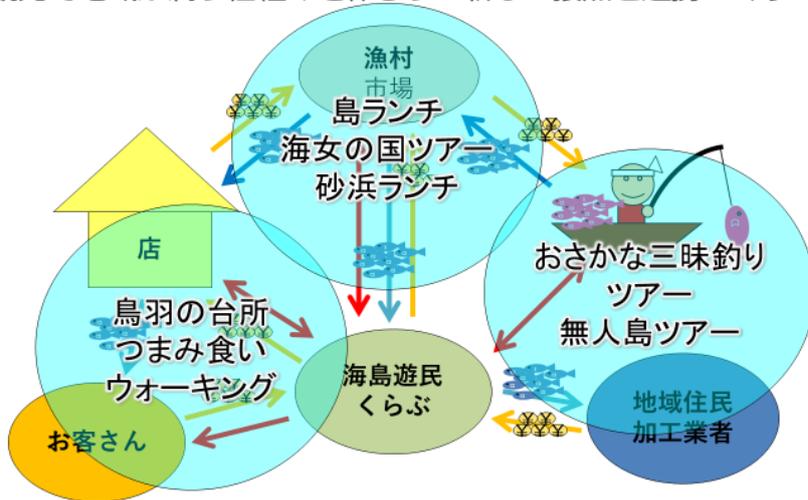
鳥羽市と山田町

鳥羽市産業別就業者数 合計人数10,866人（平成22年度） 山田町産業別就業者数 合計人数8,190人（平成?年度）



全体としては町の雰囲気が違う→漁村地域の観光

観光で地域が潤う仕組みを作ろう！新しい接点と連携づくり



「あり続けてほしい」地域貢献：子どもガイドボランティア 菅島「島っ子ガイド」

育成・企画期間2008年12月～現在に至る
菅島小学校の協力の下、自分の島の自然の特徴と生活文化のつながりを調査し他所から来た人たちにガイド・プレゼンテーションすることにより、島の貴重な資源を大切に思う心を育てる。



第1回 12/19しまっこガイド誕生！！
ガイドってなあに??



第2回～4回 僕の私の大好きな菅島
見つけた！これが一番やあ！

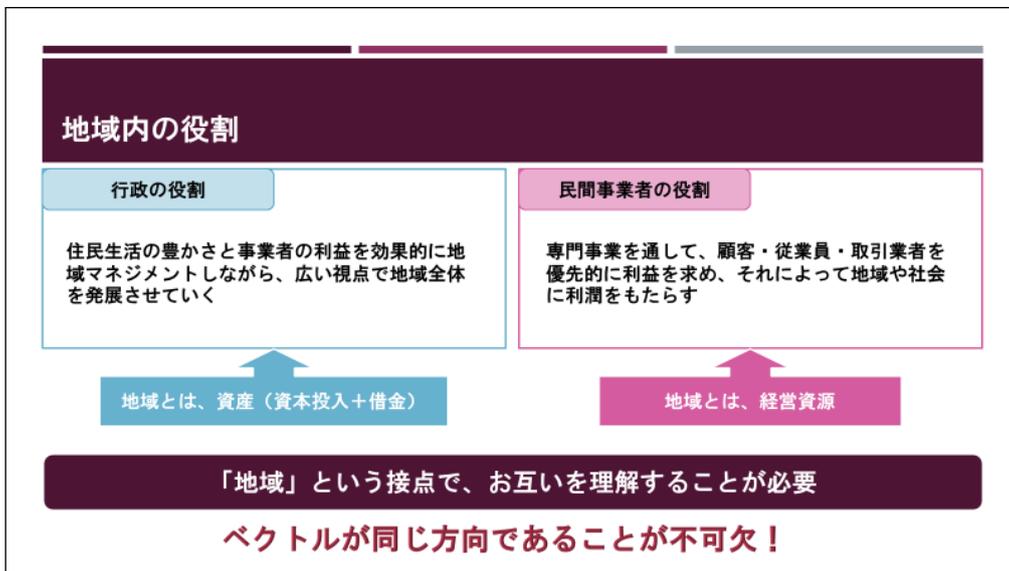
51

3月3日(金) 16時～17時30分 山田町まちなか交流センター

「なぜいま町をあげて観光を推進することが必要なのか」

対象：山田町役場職員、商工会職員、観光協会職員、議員、一般

行政や民間人も公的な立場として参加している人々であったため、行政と民間の関係性と役割をどう考えるかという見地から、講義を行った。また、行政と民間が協力して、目的を達成することの必要性から、講義のタイトルを「観光による地域活性化の戦略と手法」と変更させてもらった。若手の行政職員の参加も多く、山田町観光復興ビジョン「山田プライド」が平成28年3月に完成しているの、今後のアクションプログラムに期待がかかっている。実際の行政と民間との連携についてと、地域内でのエコツーリズムの効果を理解していただけたようだった。



観光立国推進基本法

観光立国推進基本法の概要

観光基本法(昭和38年)を全面改正。平成18年12月13日成立、平成19年1月1日施行。

<p>題名 観光立国の実現を国家戦略として位置づけ、その実現の推進を内容とするものであることにかんがみ、題名を「観光基本法」から「観光立国推進基本法」に改正。</p> <p>前文 少子高齢社会の到来や本格的な国際交流の進展を機軸に、観光立国の実現が21世紀の我が国経済社会の発展のために不可欠な重要課題と位置付け。</p> <p>目的 観光立国の実現に関する施策を総合かつ計画的に推進し、もって国民経済の発展、国民生活の安定向上及び国際相互理解の増進に寄与すること。</p> <p>基本理念 観光立国の実現を推進の上での ①豊かな国民生活を実現するための「住んでよし、訪れてよしの国づくり」の認識の重要性 ②国民の観光旅行の促進の重要性 ③国際的視点に立つことの重要性 ④関係者相互の連携の確保の重要性を規定</p>	<p>関係者の責務等 ①国の責務 観光立国の実現に関する施策を総合的に策定、実施する。 ②地方公共団体の責務 地域の特性を活かした施策を策定し実施。また、広域的な連携協力を図る。 ③住民の責務 観光立国の重要性を理解し、魅力ある観光地の形成への積極的な役割を担う。 ④観光事業者の責務 観光立国の実現に主体的な取り組みを行うこと。 ⑤観光立国の実現に主幹的な取り組みを行うこと。</p> <p>「観光立国推進基本計画」の作成 ①観光立国の実現に関する長期についての基本的な方針 ②観光立国の実現に関する目標 ③観光立国の実現に際し、政府が総合かつ計画的に講ずべき施策 ④その他、必要な事項を盛り込んだ、閣議決定による観光立国推進基本計画を策定。 (国土交通大臣がとりまとめを担当)</p>
--	--

基本理念

④関係者相互の連携の確保の必要性

連携の確保

「持ちつ、持たれつ」
両方にとって欠かせない接点を持つこと

互いに効果をもたらす『観光資源』

鳥羽市と観光協会による取組への道のり



予算とリーダーシップ→あいまいにできない

PRのみ...戦略なし

【H18年市議会での観光予算説明】
本市の美しい自然や恵まれた食材・観光資源などを宣伝するため、観光ポスターやパンフレット等を作成して、全国的に鳥羽をPRするとともに、各地の観光展やイベントへも参画し、観光客の誘致・集客交流を図る

戦略的展開の始まり

【H19年第1次観光基本計画策定委員会】
・観光資源の保全・活用戦略
・観光ルート・交通戦略
・観光基盤整備戦略
・景観・環境戦略
・ホスピタリティ戦略
・食品・土産品戦略
・旅行商品・プロモーション戦略

前期・後期アクションプラン

戦略的展開の始まり

【H26年第2次観光基本計画策定委員会】
・テーマ別戦略
海文化ネットワーク構想・漁観連携・芸術の観光活用・インバウンド
・地域別戦略
中心市街地・離島

平成27年度 アクションプログラムの検討

これからの漁観連携



ふるさと納税

観光協会が企画・運営
財源拡大・確保
域内への波及効果

水産物の流通

漁協・観光協会・行政・
アドバイザー常教授
(三重大資源循環システム学)
協議会設立

明確な課題

ブランディング・体験 ・水産資源の回復

各漁協支所・観光協会若手・行政
豊かな漁村づくり推進委員会
委員長/アドバイザー 江崎貴久

明確な課題

フォーマットに当てはめるだけでは、ビジネスモデルにならない
どこかのモデル活用は、良いところより、問題・課題を超えてバージョンアップさせる

最近の私の仕事: 豊かな漁村づくり推進委員会委員長

2016年度の目標「漁師の信頼を取り戻す」



1本釣りサワラのブランド化事業
アワビ増殖・出逢いプロジェクト



観光協会としての
資源問題(水産・観光)
への取り組み

68

ふるさと納税も鳥羽市から、観光協会へ

平成25年度 鳥羽市での運営 約3800万円

↓
平成27年度 鳥羽市観光協会へ委託 約2億円

↓
平成28年度 約4.8億円

一次産業の生産

2次加工品

旅行商品

やる気のある民間へ！やる気がない民間にはやめてもらう！

3月3日（金） 18時30～20時 山田町まちなか交流センター

「交流人口増加に、自分たちもなにかできる」②～観光客を呼び込む町の活性化のアイデア～

対象：飲食店、商工会会員、商工会青年部、商店街、グループ補助金事業者、一般

前述①と同様

3月4日（土） 10時～12時

「体験観光で山田町をもっと楽しく」

～体験観光とは？ 体験プログラムの作り方とは？～

対象：体験観光受け入れ事業者、体験観光を今後受け入れたい方、体験観光に興味のある方、町の活性化のために何かやってみたいと思っている方

エコツーリズムについて鳥羽や海島遊民くらぶを事例に解説しながら、体験プログラムやガイドツアーの作り方について簡単なノウハウをレクチャーした。自己分析からターゲットとコンセプトを決める方法を体験してもらった。さらにアドバイザーが魅力を感じた地域資源のうち、2つ「やませ」と「帆立小屋」をお題に設定し、それぞれのお題ごとにチーム分けをし、2チームで実際のプログラムを考えながら観光資源化を行うプロセスを体験してもらった。短時間にプログラム作りを体験し、参加者に自信がついたように感じた。

作り方と売り方はセットで考える、それが「マーケティング」です。

- セグメント
- ターゲット
- ポジショニング



自分のポジショニング マーケティングは、ガイド(自己)自身の分析から

簡単な自己分析をしてみよう！

- ガイド分析（長所・特技・好きなこと）
爽やかさと優しさが半分ずつ・スポーツが好き
海と漁村育ち・地域の絆が大切・ボーイッシュ
- どんな人に好まれる？友達で多いタイプは？
女性客に好まれる・故郷が好き
スポーティな人・爽やかな人・悩みが多い人
- 自分の長所は、他の人にとってどんな価値がある？
純粋な気持ちになれる・自然体になれる
リーダーシップに安心感がある
・挑戦する気にさせてくれる

戦略的マーケティングでいうと・・・

- テーマ例
海の爽やかさと厳しさ、漁村の強さと優しさ
- マーケット・ターゲット例
アクティブな人々・優しさを必要とする人々
女性・大学生・同級生・アクティブなカップル
ヤル気になりたい人
- 価値・商品コンセプト例
コミュニケーションで、お客様の素顔が輝く

作り方① 地域資源の観光資源化する方法 「らしさ」+「ならでは」の法則

「地域資源」+「光る仕掛け」=地域の魅力(観光資源)



- ☆優れた技術
- ☆「今だけ・ココだけ・あなただけ」など希少性
- ☆人気や愛されていること

が、伝わる自分なりの方法！

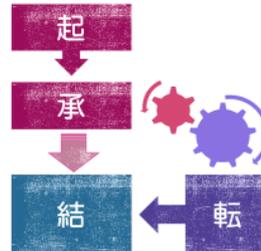
- 職業の違い：ガイド・職人・飲食店員...
 - 個性：長所・特技・好きなこと...
 - チームカラー：共通点・目的の共有...
- ...を活かして →

商品
価値
セグメント

作り方 ②展開:起承転結のあらすじ

地域資源とターゲットが決まったら、「起承転結」を基本に「ならでは」の展開ストーリー・流れを考える

- 「起」は、トピックや現状の説明
- 「承」は「起」を受けて、詳細や背景など肯定的な内容
- 「転」は、意外性や反転といった、心が転じるような展開。飽きさせない効果あり。
- 「結」は、「転」を受けて全体のまとめ



チェック! : お客様の視点・地域の視点は入っているか?

25

3月4日(土) 14時~17時

「おもてなし講習」

対象: ガイド、体験観光の受け入れをしている事業者、おもてなしを学びたい方

この時間のみ空いていたということで来てくれた漁師が参加してくれたことと直前のプログラム作りが盛り上がっていたため、おもてなし講習は時間を半分程度にして実施した。

それぞれが考えたプランを相互に発表してもらい、質疑応答とアドバイザーのコメントを行った。その後、おもてなし講習を行った。おもてなし講習は、「おもてなしとは何か」「ふさわしいおもてなし」「ガイドのテクニック」を座学として行い、その後ガイドのおもてなしを伴ったテクニックについて、ロールプレイングで行った。ガイドの実感が得られたようだった。

今日のお題は、2つの観光資源

「やませ」のツアー



楽しいやませと、暑い温泉
船越半島の遊歩道で出会うかも。
解説しやすいし、トレッキングツアー
シカヤックでも

四季の海から見た山
山から海の向こうに沈む夕日
朝のやの中船、漁船、気風
山田の早朝

真夏の極サ身体験6~8月
暑・寒い・熱い
見えないとき→かこやさんの冷蔵庫で寒さ体験
体の芯まで、あったまることが大事とおばあちゃんにいわれた。
楽しい自然とともに暮らすこと
やませがあるから、涼しい、一次産業には迷惑だけど。
暑いお風呂が平気な漁師さんと一緒に入る
震災後だから、良さが分かった、シンプルに見えて? わかったこと。
ターゲット: 内陸の人、女性、大人
地域: やませがお宝に! 地域理解・観光による経済効果
観光客: ダイナミックな景観を感じる? 体で感じる温度、
自然:
ガイド業: 成立



イカダの舟、ホタテゴヤ
建てること自体が目的ではない
収穫~調理まで
ゴミがついている。まきれいになるまでのプロセス、ここが大切な
帆立幼少時代を語る。

建てること...はさておき
ホタテゴヤは、いろいろ! イロイロホタテゴヤ
黄色・スモークハウス・スモークホステ!
祭... 帆立がっばりレディースのショー
オールドクス
収穫時のことを知ってもらう。
漁み... 遠年積える! 時期によって魅力が違う!
3月、ブスの卵巣はオレンジ、精巣は白、オレンジは、3~4月は生で食べられる!
葉・身柱が大きい、脚いっさり大きな貝柱
ホタテガイが、山田に来るまで~山田に来てからの苦労と喜びの成長録~どこへいく?
結... 食べる。EX青小屋に入ったら、はずれ~食べられないとか。違う貝
手間暇への理解から、高いことに納得、いや、むしろ安い!
ひとり¥4000、農小2名

帆立小屋体験

14

「らしさ」+「ならでは」



「地域の素材」+「光る仕掛け」=地域の魅力

ここにしかない「もの」や「こと」
☆限定
「今だけ・ココだけ・あなただけ」
☆優れた技術
☆人気や愛されていること

このサービスや行為が、
あなたの職業であり、専
門性、そしてこだわり！

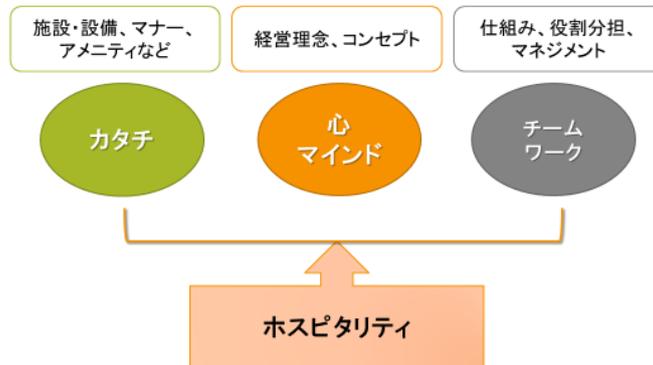
「会社ならでは」「プログラムならでは」「自分ならでは」

個性が発揮される仕組み・マニュアル

優劣のない個性

優劣のない個性を発揮するために

- ・質と個性の違い
- ・ガイドに必要な総合力
- ・ホスピタリティの実践
- ・ハートとマインドで、
おもてなしのクオリティを一定に





4) エコツーリズム推進全体構想への取り組み状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は、エコツーリズムの考え方やエコツアーによる効果の実感段階であり、時期尚早かと思われる。

②全体構想策定への意向について

現状は、低い。まずは、エコツアーや体験プログラムの実施による実証が求められている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

ようやく山田町観光復興ビジョンができたところである。行政内での全体構想への具体的な取り組みの必要性が見出されなければならない。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

山田町観光復興ビジョンが完成したことから、その施行を着実に進めていくことが重要である。また、震災復興が急を要したため、記録や経緯の不明な点による混乱が、行政の業務を圧迫している現状がある。そのため、国やアドバイザー、コンサルタントが実績を焦り、押し付けるような事業の進め方を避ける必要があると強く感じた。

また、計画ばかりではなく、観光による地域への効果は想像を越えるものであり、最初から枠にはめて考えていると想像以下の効果しかでないという私自身の経験から、この地域の自然発生的なコミュニティの治癒力と自然のポテンシャルに対する創造力を自由にすることで、取組が膠着する地域の次へのヒントともなりうる。

また、初日から参加していた人の中には、他の方との面識がない方もおり、最後まで続けて参加できるかが心配だったが、ワーキングを通してとても積極的に発言する姿が印象的だった。こうして発見された新たな人材を今後地域で、フォローアップしていただきたい。

1-4-3. 南アルプスジオパーク協議会

(長野県飯田市・伊那市・富士見町・大鹿村)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】約 13,000 人（南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークエリア）

【面積】1084.31km²（南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークエリア）

【地勢】

南アルプス（赤石山脈）は山梨県・長野県・静岡県にまたがる山岳地帯で、南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークとして日本ジオパークに認定されているのは南アルプスのうち長野県の範囲である。北から諏訪郡富士見町、伊那市高遠町・長谷、下伊那郡大鹿村、飯田市上村・南信濃を含む南北約 80km、東西約 30km の南北に細長い範囲となっている。標高は約 300m から 3,121m に及ぶが、居住地は範囲内を南北に走る国道 152 号の長い谷沿いを中心に、標高約 1,200m までである。

【気候、自然】

夏季に降雨が多く、冬季に乾燥するという太平洋岸の気候傾向を持っているが、東西を 3,000m 級の高山からなる山脈に囲まれた標高の高い谷地であるので、日及び年の寒暖差の大きい内陸性気候となっている。日本アルプスで最も南に位置する南アルプスは、日本列島に存在した氷河の南限であったことから、氷期の遺存種が生育・生息し、また多くの種の分布の南限にもなっている。石灰岩や蛇紋岩などが分布し岩石の種類が多様で、暖温帯から高山帯までの多様な植物が生育している。

【歴史】

現在国道 152 号が走っている谷は、古来人々が行き交い、山と海とをつなぐ物、文化及び信仰の交流の連絡路となっていた。谷を通る道の歴史は、縄文時代、諏訪地方和田で産出される黒曜石と、相良の海で採れる塩の交換が行われたのが起源と考えられている。この交流の道は遠州古道と呼ばれ、縄文時代の遺跡がいくつか発掘されている。戦国時代には戦の道、江戸時代には現在の静岡県浜松市にある秋葉神社に参詣するための信仰の道となり、秋葉街道と呼ばれるようになった。現在もこの道沿いに人が暮らし、物や文化の交流がある。

【観光】

長野県による観光地利用者統計調査によると、南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークエリア内の観光地利用者延数は年間合計約 158 万人（平成 26 年）。うち、関東からのアクセスの良い入笠山（富士見町）と日本三大桜として有名な高遠城址公園（伊那市）の 2 箇所の合計利用者数でほぼ半数を占めている。南アルプスへの登山客も 1 割を占めるが、登山前後に観光地へどれほど訪れているかは不明である。

【地域資源の概要】

日本ジオパークに認定されている南アルプスであるが、地質以外の資源も豊富であり、ユネスコエコパークに登録されているように豊かな自然環境が保全され、また秋葉街道を中心とする歴史や独特の文化についても見どころが多い。

地形地質：安康露頭・北川露頭（ともに国天然記念物）他、中央構造線露頭と断層に沿ってできた地形、海底でできた多様な種類の岩石からなる 3,000m 級の山々、その景観、海なし県で産出するアンモナイト化石

生物：氷期の遺存種や固有種、分布の南限の種、高山植物、石灰岩／蛇紋岩植物、ニホンライチョウ・ニホンカモシカ（ともに国特別天然記念物）

歴史文化：霜月祭り（国重要無形文化財）、大鹿歌舞伎（国選択無形文化財）、熱田神社・福德寺（国重要文化財）

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

《背景》

2008年に南アルプスの長野県側が「南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク」として日本ジオパークに認定された。ジオパーク活動の中心となるジオツーリズムを進めるため、2011年からはジオパーク協議会がジオパークガイド養成講座を開講し、これまで約100名をジオパークガイドとして認定した。2014年には、熱心な認定ガイド約30名が中心となり、「南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク認定ガイド会」を設立した。

《地域課題》

ジオパーク認定ガイドは現在有料ガイドとして活動しているが、最初のうちはボランティアガイドだったため、ガイド認定にそれほど厳しい基準を設けておらず、ガイドのレベルにばらつきがある。また、せっかくガイド認定されても実際にガイドをする機会が少なく、それがレベルアップしにくい原因にもなっているが、ガイドをする機会を積極的に作ることもあまりしていない。

《これまでの取り組み》

これまで最大のガイドの機会は、2014年9月に南アルプスで開催された第5回日本ジオパーク全国大会の後、7コースのエクスカージョンが実施され、ガイド総出で案内をしたときである。また、ガイド会企画で、予行として同年にそのうち3コース、またメモリアルとして翌年に4コースを、南アルプスジオパーク協議会会員のバス会社でツアー参加者を募集し、両年とも2コースを催行した。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 1 日（水）～平成 29 年 3 月 3 日（金）
場 所	長野県伊那市 南アルプス長谷ビジターセンター、零磁場ミネラル株式会社、溝口露頭、戸台の化石資料室、熱田神社、伊那市創造館
アドバイザー	楠部真也氏（株式会社ピッキオ マーケティングディレクター／取締役）
参加者	計 23 名 伊那市世界自然遺産登録・エコパーク・ジオパーク推進室係長、同主査、同専門職員 南アルプスで活動するガイド 20 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】 現地視察 南アルプス長谷ビジターセンター、零磁場ミネラル株式会社、溝口露頭、戸台の化石資料室、熱田神社</p> <p>【2 日目】 伊那市創造館 3 階講堂にて講義 座学①自然ガイドの現状とガイドの必要な資質について 座学②ガイドプログラムの企画＋売り方 実習①ツアーコース作成 実習②ツアーコース作成、講評</p> <p>【3 日目】 伊那市創造館 3 階講堂にて講義 座学③現場から見た日本のエコツーリズム 座学④地域に自然型観光を定着させるには</p>

(3) アドバイスの内容（議事録）

【現地視察】

《視察地》

○南アルプス長谷ビジターセンター

道の駅内にある。ビジターセンター横にあるパン屋への来客は多いが、ビジターセンターへ立ち寄る人は少ない。冬期間、ビジターセンターは無人開館である。

○零磁場ミネラル株式会社

伊那市と大鹿村の境にある分杭峠はパワースポットで、多数の登山客が訪れる南アルプスの山々を除けば、伊那市長谷地区で最も誘客力のある場所である。零磁場ミネラル株式会社は、分杭峠で採取された水を分杭峠行きシャトルバス乗り場そばで販売し、その店自体も見どころとなっている。

○溝口露頭

日本最大級の断層、中央構造線を観察できる。アクセスの良さ、わかりやすさなどから、伊那市長谷地区で一押しジオパークの見どころである。

○戸台の化石資料室

溝口露頭のすぐ近くにあるので、セットで訪れることが多い。近くで産出するアンモナイトやサンカクガイなどの化石を収蔵し、化石の一部は展示されている。今は高い山となっている南アルプスの大地が海の底でできたことの証明となっている。

○熱田神社

地元の浄財のみで建てられた、国重要文化財。彫刻が見事で、伊那日光とも呼ばれる。日本武尊にまつわる伝説もある。

《助言》

- ・零磁場ミネラルの店で方位磁石が勝手に回る現象は、かなり面白い。無料駐車場の大きさも十分なので、ここを発着にしたツアーをつくれればどうか。
- ・地学的な見どころは、他の季節に訪れても見た目はあまり変わらない。一度見れば十分なので、リピーターを生みにくい。
- ・ジオパークだからといって客が来るわけではない。ジオパークを続けるのか検討することも大事。
- ・熱田神社にある、分杭峠と同じ気を発するという気場がおもしろい。

【講義】

○自然ガイドの現状とガイドに必要な資質について（3月2日 9:15～10:45）

- ・海外では自然ガイドが職業として位置づけられているが、日本では職業としてとらえられておらず、自然資源がお金をとれるものとして認知されていない。
- ・ガイドは地域と観光客を結びつける人であり、地域の代表ともなりえる。良質でないガイドは地域にとってマイナスの評価になる。
- ・知識は学べば得られる。ガイドはまず、人が好きなことが大事。
- ・エコツーリズムを成功させるには、ビジネスとしての成功が不可欠。

○ガイドプログラムの企画+売り方（3月2日 11:00～12:30）

- ・ツアープログラムを考える前に、入込客数、季節変動、入込客層、消費額、観光客の流れなど、自分たちがどのような市場なのか知ることが必要。

- ・ターゲットを絞ったうえでツアーを考える。ターゲットがない商品は売れる確率が格段に下がる。
- ・地域性のある素材は重要。

○現場から見た日本のエコツーリズム（3月3日 9:15～10:25）

- ・エコツーリズムの認知度、エコツアーへの参加意向は、ともに低い。エコツーリズムはしばしば環境教育と混同され、旅に出て勉強などしたくないと敬遠されることがある。
- ・エコツーリズムは行政には浸透してきているが、観光市場では悪化傾向。しかし持続可能な観光にするためには、行政ではなく民間主体が理想。
- ・欧米人のエコツアー経験者は日本人の約6倍で、参加意向も日本人より高い。海外に対する情報発信が必要。ただし国によって趣向は異なる。

○地域に自然型観光を定着させるには（3月3日 10:35～11:50）

- ・自然型観光の定着には、観光客を呼べる資源だけでなく、観光産業（宿泊施設）やツアーを実践するガイド、地域の理解、事業者が生活できる所得も必要。
- ・地域内外での軋轢が課題になっていることが多い。

《意見交換》（3月3日 11:50～12:30）

- ・「晴れていればこのような景色が見られるのですが」ではお客様はがっかりする。雨天時用のプログラムや補償になるものを作ったほうがよい。ピッキオでは、ムササビウォッチングでムササビを見られなかった場合、次回に使える無料券を配布することがある。
- ・地域にガイド団体が複数ある場合、統合するもよし、統合せずにそれぞれが独自の味を出すもよし。ただしお客様にとっては同じようなもの。一元化するのは便利。
- ・日本全国で、縦割りの弊害がある。ガラパゴスでは観光、保護、教育をすべて同じところで行っている。
- ・長野県内で最も外国人が訪れているのはスノーモンキーのいる地獄谷。それが報道されると日本人客も増える。
- ・行政は規制（ルール作り）が上手。客をとってくるのは民間。
- ・ホテルにコンシェルジュが設置されているのが理想的でよいが、設置するのは観光協会の役割か。ホテルに知人がいれば、直談判してガイドが常駐という手もある。
- ・伊那特産のグルメ、ローメンは自分で味付けができるのがおもしろく、美味しい。売りになる。

【実習】

○ツアーコース作成（3月2日 13:45～15:15）

居住地、ガイド種別などに応じて4つのグループに分かれ、ツアーコースを試作。

○作成したツアーコースを発表、講師から講評（3月2日 15:30～17:00）

- ・ジオパークガイドグループ1「石ころからわかる南アルプスのふしぎ」

年間シリーズで行うツアーの春の巻。地元の小中学生対象、参加費5,100円。石投げ大会、岩石標本作成などを行う。

（講評）石に集中し、よくまとまっているが、地元民がそれだけの参加費を払うかどうか。名古屋など都会の子供をターゲットにしてみてもよい。その際、学校の先生に直接売りこむとよい。また、近くで産出する化石探しを入れるとより魅力的になる。

・ジオパークガイドグループ2「秋葉街道巨木めぐり～夜泣き松編～」

定員 20 名、10 月下旬～11 月上旬実施、参加費 3,500 円。宗良親王ゆかりの夜泣き松を見たあと里山ハイキング、お弁当を食べて下山後は温泉へ。

(講評) 論理的に考えられている。「夜泣き松」とは何なのかわからないので、「南北朝」などわかりやすい言葉を入れ、ターゲットを絞る。秋はツアーが売れない。パンフを置くだけで終わらせずに、口コミを使う。

・観光ガイドグループ1「高遠桜と史跡めぐり」

観桜期に、天下第一の桜として有名な高遠城址公園と周辺の史跡をめぐる。家族連れ対象、参加費 1,000 円。

(講評) タイトルがわかりやすいので、旅行会社に売りやすい。中身が濃いので、午前・午後の 2 本のツアーにできる。バラのほうが売りやすい。宿でツアーを紹介してもらえるよう、宿のスタッフに無料体験してもらおうとよい。

・観光ガイドグループ2「中央構造線めぐり」

一般対象、7 月頃実施。中央構造線を観察できる 3 つの露頭をめぐり、大鹿村中央構造線博物館で学ぶ。

(講評) 一般ではなく、修学旅行などとしてターゲットを学校団体に絞ってみては。伊那市で推進している民泊と組み合わせるものよい。



現地視察で訪れた零磁場ミネラル株式会社

グループに分かれツアーコース作り



作成したコースを発表し講評を受ける



講義の様子

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・行政には任せずに民間で持続可能な観光をめざすという考え方が得られた。

2) 今後、期待される効果

- ・実習で作成したツアーを更に練り、他のコースも作って実際に売りに行く。

3) 今後の取り組み

- ・ジオパーク活動、ガイド養成を今後も続けていく
- ・ガイド養成講座で、案内に必要な知識を学ぶだけでなく、今回の講座のような視点を学ぶ機会を作る。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・持続可能にするためには、行政や補助金に頼るのではなく民間主体でという視点
- ・ジオツーリズムやジオツアーだけでなく、エコツーリズムの認知度、エコツアーへの参加意向の低さ
- ・自然資源は売りにできるということ、海外の方をターゲットにするということ
- ・しくじり事例

2) その他感想

- ・ガイドだけでなく観光協会職員も話を聞くようにすればよかった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

楠部真也氏（株式会社ピッキオ マーケティングディレクター／取締役）

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

伊那市は南アルプスジオパークとして認定されており、地域にはジオパークガイドと、従来からある観光ボランティアガイドの2種類がある状態。地域おこし協力隊にいた方がガイド業として自立を目指している。

②課題

伊那市の観光は現状は高遠の桜に集まる観光客が最も多く、みはらしファームなどの体験施設はあるものの、観光収入はあまり多くない。ジオパークではあるものの、それが起爆剤になっているわけではなく、ガイドも存在するものの、それを職業としている人はいない状況である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

高遠の桜

②上記地域資源に魅力を感じた理由

高遠の桜は全国的に有名であり、それだけで国内観光客を呼んでいる自然資源。そのような強力な観光資源をもった自治体（市町村）は多くなく、そこに集まった観光客をリピートさせたり、ロコミ効果を高める事で、観光消費額を増大させられる可能性がある。

3) アドバイス（講義等）の概要

以下のスケジュールでアドバイス（講義等）を実施

初日：フィールド視察

二日目：講義 「ガイドの現状とピッキオの紹介」「プログラムの企画立案」

ワークショップ：ガイドツアープログラム作成と販売方法の検討

三日目：講義 「エコツーリズムの実態」「地域にエコツーリズムを定着させるには」

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在のところ、まだ取り組んでいる状況ではないように見受けられた。

②全体構想策定への意向について

エコツーリズム推進よりもジオパークを重視しているように見える為、全体構想策定意向については未知数であった。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

桜の季節以外の季節の観光客誘致、エコツーリズムの地域内の認知向上（現状はジオパークの中の一

環で事業は実施されており、“エコツーリズム”の認知率は他地域と比べても低い可能性がある。)

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

伊那市を総合的にとらえると前述の通り高遠の桜があり、体験施設としてみはらしファームなどもある。中央アルプスと南アルプスに挟まれた天竜川の景観は美しく、ローカルな食事としてローメン、ソースかつ井といったものまであり、観光客をリピートさせる仕組みはある程度揃っている。

ジオパークの考え方としては保護活動が前提としてあり、素晴らしい考え方であるが、観光資源としてとらえると、中央構造線だけで観光客を呼べるものとは今の段階では言い辛い。従って、ジオパークを単独でアピールするのではなく、他のスタイルの観光と組み合わせる事で誘客を図る事も必要ではないだろうか？

これは、地域外（市外）の連携も同様である。観光客は“伊那市”だけを目指して来訪することは少ない。高遠の桜を見に来る観光客も次の日は別の町に移動する事も多いと思われるので、近隣の市町村と Win Win の関係を築ける部分では協力し、場合によっては競争もしながら観光振興を図る必要があるであろう。

1-4-4. 六甲摩耶観光推進協議会（兵庫県神戸市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 136,753 人（兵庫県神戸市灘区）

【面積】 32.66 km²（兵庫県神戸市灘区）

【地勢】

兵庫県神戸市灘区に位置する。

【気候、自然】

六甲山は、温暖な瀬戸内に位置するが、標高 931m のため、神戸市街地よりも、気温が平均して 5℃～6℃低く、夏は冷涼、冬は最低気温が氷点下となることが多い。

【歴史】

明治中期に神戸市街地の外国人たちにより、夏の避暑地として観光開発が始まる。大正から昭和にかけて、別荘地の分譲や、ホテル、ケーブルカー、ロープウェイ、植物園、遊園地、ドライブウェイなどが順次整備され、眺望や自然環境などが楽しめる都市近郊のリゾートが形成される。昭和 31 年には、瀬戸内海国立公園に編入される。

【観光】

（交通アクセス）

六甲ケーブル、まやビューライン（摩耶ケーブル、摩耶ロープウェイ）、六甲有馬ロープウェイ、表六甲ドライブウェイ、裏六甲ドライブウェイ等（観光施設、体験施設）六甲高山植物園、自然体感展望台六甲枝垂れ、六甲山スノーパーク、六甲山牧場、森林植物園、六甲ガーデンテラス、自然の家、六甲山 YMCA など

（宿泊施設）

六甲山ホテル、オ・テルド摩耶、六甲スカイヴィラなど

（展望スポット）

天覧台、掬星台、六甲ガーデンテラスなど

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

六甲山・摩耶山地区は、都市近接の自然環境エリアとして、多くの市民により、ハイキングやトレッキング、登山などが、日常的に楽しまれている。また、大阪湾一帯を望む眺望や夜景、四季折々の自然などを楽しむ観光客が、国内外から訪れる観光地としての側面もある。

特に近年は、海外からの観光客も増加傾向にあり、大阪や京都、神戸などの都市観光とともに、眺望や、自然（紅葉、雪など）を求めて六甲山を訪れるケースが増えている。

また、国内においても、健康増進や自然の中での諸活動へのニーズの高まりを感じており、六甲山・摩耶山の魅力をさらに高め、より多くの方に、その魅力を体感・体験していただくことで、六甲山・摩耶山のファンを増やしていきたいと考えている。

そのために、かつて、エリアとして取り組んできた「エコツアープログラム」に、改めて戦略的に取り組み、魅力あるプログラムの創出と提供を通じてファン作りに努め、また、それらの取り組みを継続させるための人材育成や、組織の構築を行うことで、最終的には、それらを「六甲山・摩耶山のエコツアープログラム」としてブランド化を目指していきたいと考えている。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 15 日（水）～平成 29 年 3 月 16 日（木）
場 所	六甲山・摩耶山（兵庫県神戸市灘区） 【視察箇所】 六甲ケーブル、天覧台、旧山形山荘、六甲山カンツリーハウス、六甲山YMCA、神戸市立自然の家、摩耶山掬星台、六甲山牧場、六甲スカイヴィラ、六甲高山植物園
アドバイザー	川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）
参 加 者	【3/15（水）】 計 12 名 環境省神戸自然保護官事務所 神戸市経済観光局観光コンベンション課 神戸市灘区まちづくり課 六甲山観光株式会社営業企画室 六甲山 YMCA 館長、神戸市立自然の家 所長 六甲山牧場、六甲スカイヴィラ支配人 【3/16（木）】 計 8 名 環境省神戸自然保護官事務所 神戸市経済観光局観光コンベンション課 神戸市立森林植物園 六甲山観光株式会社 営業企画室、アミューズメント課
スケジュール・方法	【1 日目】 13:00 六甲山上で昼食・ミーティング （スケジュール確認、各施設の概要等の説明） 14:00～19:00 六甲山上各施設（※）の視察、課題等の説明 19:00 夕食・ミーティング（視察、課題説明を踏まえた意見交換） 20:00 六甲山上ホテル泊 （※）六甲ケーブル、天覧台、旧山形山荘、六甲山カンツリーハウス、六甲山YMCA、神戸市立自然の家、摩耶山掬星台、六甲山牧場、六甲スカイヴィラ 【2 日目】 9:00～9:30 六甲高山植物園の視察、課題等の説明 9:30～12:30 ミーティング （各施設の視察及び課題等を踏まえたアドバイス、質疑応答） 12:30～13:30 昼食・ミーティング（意見交換）

(3) アドバイスの内容（議事録）

■組織づくりについて

- ・ キープ協会（山梨県清里）における環境教育事業の発展過程について説明を受けた。最初は一人で始めた事業であったが、少しずつ大きくしていき、仲間を増やしていった。約30年かけて、現在では、スタッフ数で約30名の規模の組織に成長しており、また、事業としても成り立っているとのこと。
- ・ 環境教育事業を発展させていくためには、PDCAサイクルをしっかりと回しながら（特にCのところ）、プログラムの改善につなげていくことが必要。
- ・ スタッフの採用・育成については、キープ協会では1996年から始まった研修生制度（11ヶ月）があり、その研修生の中から新規のスタッフを採用している。

■プログラム開発について

- ・ ちょっとした小道具を使って自然の見方を変えることが出来、例えば、小さな鏡を使って森の中を下から見上げて歩くことで、森の様子が鮮明に見えてくることや、鏡を2枚合わせて、その間に木の実などを置き、鏡の角度を変えることで、万華鏡のような光景を作り出せることなどの事例を紹介していただいた。

■グループワーク

- ・ レクチャーの後には、グループワークとして、六甲山・摩耶山地区でエコツアープログラムを進めるにあたっての「課題」と「可能性」をそれぞれ紙に書き出し、ホワイトボードにそれらを貼り出し、参加者間で、共有した上で、それぞれの内容についての、アドバイザーとの質疑応答や、参加者間での意見交換を実施した。
- ・ 課題として多かったのは、「継続していくため」の仕組みづくりや、人材育成、リーダーシップ、広報面（どのように伝えていくか。関西以遠への情報発信）といったこと、可能性としては、多種多様な施設や素材があり多様な切り口での連携が可能であることや、自然と文化とを合わせた魅力が作れること、などがあげられた。

■各施設視察及び、現地説明の様子



■講義、グループワークの様子



(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・各施設の現状や、課題等について共有できた。
- ・「エコツーリズム」の可能性への期待と、それを軸とした施設間連携に向けての機運が高まった。

2) 今後、期待される効果

- ・「エコツーリズム」を軸に、各施設単体ではなく、「六甲山・摩耶山」エリアとして、広報や、プロモーションをかけることで、集客力を高めることができる。
- ・単体施設では、実施プログラムのバリエーションや、ボリュームに限界があるが、エリア全体として束ねることで、利用者にとって魅力のある、ボリュームやバリエーションを出すことができる。

3) 今後の取り組み

- ・2017年度夏季に向けて、まずは、各施設でのエコツーリズム関連の既存プログラムを集約し、共同でのプロモーション（パンフレット、ポスターの制作及び、WEB等での情報発信及び、山上の案内所での案内、紹介等）を実施する。
- ・新規のプログラム開発や、実施プログラムのエリア全体での最適化、プロモーション効果の最大化に向けて、エリア内でのミーティングを定期的に開催する。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・キープ協会での環境教育プログラムの発展の過程や、また、プログラム開発においても、「ちょっとした」工夫で、魅力的なプログラムをつくるということが可能であるということが、今後の実践に向けて参考になった。
- ・グループワークの際に、KP法（紙芝居プレゼンテーション）についてのレクチャーをしていただいたが、今後、エリア内でのミーティングの際に、課題の整理や、解決策の検討の際に、「情報及び思考の整理法」として活用ができそうである。

2) その他感想

- ・川嶋氏には、急遽のお願いで、大変多忙なところ時間を作っていただき、アドバイスに来ていただいた。エリア滞在は、短い時間とはなったが、食事をとりながらのミーティングも含めて、経験豊富な川嶋氏から、色々なお話を聞くことができ、また、中身の濃い、アドバイスを受けることができたことは、非常にありがたい経験となった。
- ・また、今回のことをきっかけに、「エコツーリズム」を軸として、エリア内（施設間）連携の機運を高められたことも、とても良かった。
- ・この機運を逃さず、エリア全体で、エコツーリズムの推進に取り組んでいきたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏 (公益財団法人 日本環境教育フォーラム理事長)

1) 地域における取り組みの現状と課題

①現状

今回 2 日間の視察で以下の各施設にご案内いただいた。

「六甲山カンツリーハウス：六甲山スノーパーク (六甲山観光株式会社)」

「山形山荘 (六甲山観光株式会社)」

「六甲山 YMCA」

「神戸市立自然の家」

「六甲山牧場」

「六甲スカイヴィラ」

「六甲高山植物園(六甲山観光株式会社)」

また、2 日目の川嶋からのレクチャーと意見交換会では、神戸市立森林植物園の園長さんも参加され資料の提供を受けた。

上記の施設は、数多くある六甲山・摩耶山地区の観光施設や体験型レジャー施設の一部ではあるが、各施設においては既に様々なエコツアーに関連するプログラムや、体験プログラムが実施されている。

今回依頼を受けた六甲摩耶観光推進協議会では、まずは各事業者が現状で実施しているプログラムを「六甲山・摩耶山のエコツアー・プログラム」としてとりまとめ、統一ブランドとして広く全国に発信することで、近隣の市民のみならず神戸市の都市観光と合わせて、神戸市以外からの観光客にも気軽に参加してもらい、六甲山・摩耶山の自然の魅力に触れてもらう機会を増やしたいということだった。

また六甲山ならではのエコツアー・プログラムを複数開発することで、より魅力のあるプログラムを提供したいと考えていると聞いた。

②課題

各事業者の取り組みをとりまとめる仕組みやマンパワーが、現状では不十分であることと、エコツアー・プログラムを開発し、継続的に実施するための人材や、事業化のノウハウが不足していることなどが課題。

そうした課題をクリアするために 2009 年に六甲摩耶推進協議会内に「エコツアー」部会を立ち上げ、また、2012 年同協議会や神戸新聞などが中心になって「六甲山大学」を立ち上げたのではなかったのか。この事務局役を担っていたホールアース自然学校が 2014 年に六甲から撤退してしまったことが、上記課題が現在でも残っていることに大きく影響しているということなのだろうか。このあたりの詳細経緯は、そこまで突っ込んだ意見交換が出来ておらず未確認である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

都市に近接して素晴らしい自然環境があり、その地形の特徴からその山腹から海方向を眺める眺望が素晴らしいポイントが何箇所もあること。また、神戸市街からのケーブルカーやロープウェイなどのアクセスが充実していること。その他、六甲山及び摩耶山の山頂間のエリアが東西に比較的なだらかな地形で、エリア内にはハイキングコースや観光施設、宿泊施設などが複数存在していることなどが挙げら

れる。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

この地域には3種類の顧客がいると思われる。まずは、神戸市とその近辺の住人たちが300万人近くいると言われている。日常的にこのエリアで様々な体験が出来る層だ。次に、国内観光客「神戸」ブランドでやってくる人たちが多いのだろうか。数的には大阪エリアからの観光客が多いだろうが首都圏などからも関西旅行の先として「京都→大阪→神戸」は揺るぎない観光地なのだと思う。そして最後にインバウンドの観光客。神戸の都会的な観光資源の体験からほんの数十分で国立公園の大自然と触れ合うことが出来る。冬場にはスキーなど雪の体験も出来るインバウンド観光客には非常に魅力的な地域と感じられる。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・山梨県清里での、財団法人キープ協会（川嶋が1980年代から30年間に勤務した）における自然体験型環境教育プログラムの発展の経緯を紹介した。最初は一人で始めた事業を少しずつ大きくしていき、今ではスタッフ数で約30名の規模に成長し、事業としても成り立っていることを説明した。
- ・キープ協会の環境教育事業が事業として成長していったプロセスでは、PDCAサイクルをしっかりと回し、個人・団体などのクライアントからのフィードバックを丁寧に受け止めて、次のプログラム改善・事業改善につなげていくことが必要。
- ・スタッフの採用・育成については、1996年から始まった研修生制度（11ヶ月）があり、その研修生の中から新規のスタッフを採用している。
- ・ちょっとした小道具を使って自然の見方を変えることが出来る、いくつかの自然環境プログラムをスライドを使って紹介した。小さな鏡を使って森の中を下から見上げて歩くような「スキヤキハイク」。白く丸いシールに目玉を描き森の木に貼り付けることで木に「顔」が生まれてくる「目玉っち」。その他、森で俳句を詠んだり（森の句会）、今日の体験の感想を感じ一文字で書いてみたり（一筆入魂）などを紹介した。
- ・川嶋からのレクチャー（約2時間）を聞いた後には、約10名の講義の参加者から、六甲山・摩耶山地区でエコツアープログラムを進めるにあたっての「課題」と「可能性」をそれぞれ紙に書き出してもらった。出された「課題」「可能性」をホワイトボードに一覧掲示して共有した上で、それぞれの内容についての参加者との質疑応答を通じて、参加者間の相互理解の促進を図った。

※上記は川嶋が六甲山滞在中に直接皆さんにお伝えしたアドバイスだ。以下に滞在中にはお伝えしきれなかったことを書いてみる。

- ・上記2) ②でも書いたが、この地域はすぐ目の前に数百万人が住んでいる。その人たちにとっては、とても手軽に(数百円&数十円の負担で)このエリアに来ることが出来る。また神戸への観光客は2,000万人超という数字がある。そのうちの100万人はインバウンドの観光客とも言われている。言うまでもなくインバウンドはこれまでの日本人の行動パターン（週末や連休・夏休みに集中）に関係なく、その谷間を埋めてくれる可能性を持っている存在だ。この「地域住民」「国内観光客」「インバウンド観光客」の3種の顧客に対して、それぞれどのようなサービスを提供しようとするのかを整理することが大事。つまり「どう売するのか（ブランディングも含めて）」ということを考える以前に、「誰に対して（ターゲティング）」「何を売するのか（プログラム開発）」の整理をすることがまずは必要なので

はないだろうか。

- ・いずれにしても、周辺住民&既存の観光客は数万人あるいはそれ以下というようなエリアと比べて何と恵まれた地域なのだろうと思う。今回訪問時に紹介したキープ協会（山梨県北杜市）の場合八ヶ岳の山梨側（北杜市）の住民は数万人だし、観光客も 200 万人程度だ。今回訪問した六甲山エリアとはまさに桁違いの数字だ。
- ・しかし、地域に住む人、国内から観光で訪れる人、海外から観光で訪れる人、この3種の誰もが顧客（あるいは顧客予備軍）であるということは、他の観光地とは違う価値や魅力を付与することが出来るということなのかも知れない。具体的なアイデアは浮かばないが、キー（鍵）は地元の顧客のような気もしている。地元の「顧客」が「サポートスタッフ」に移行するような仕組みが出来ればとも思うのだが。
- ・「アイデアは組み合わせだ」と良く言われている。例えば保育園と老人ホームをひとつの建物に入れたら双方に非常に良い影響が生まれ win win になったという話は各地で耳にする。六甲摩耶観光推進協議会の皆さんが言うような、六甲山にすでにあるポテンシャル同士の組み合わせも重要なことは言うまでもないが、神戸市の大学・学校や様々な施設・組織との組み合わせも無限にあるように思える。六甲山の中だけのポテンシャルを考えるのではなく、神戸全体のポテンシャルをどのようにして六甲で活かして行けるかを考えてはどうだろう。1時間圏内に幾つもの大学があるとは本当に羨ましい。植物園・動物園・美術館・博物館など様々な社会教育施設もあるだろう。音楽・演劇・芸術など様々なエンターテインメントの人材もいるだろう。豊富なポテンシャルをどう組み合わせるか？考えるだけでもワクワクしてきませんか？

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

同地域においては、現在のところ、全体構想にまで検討は及んでいない。

②全体構想策定への意向について

把握していない

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

把握していない

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

この地域では、既に様々な事業者において、エコツアープログラムや体験プログラムが実施されている。また以前には、ホールアース自然学校の六甲山分校が設置されるなど、エコツーリズムの推進に力を入れていた時期もある。今回依頼を受けた六甲摩耶推進協議会の事務局では、地域の統一ブランドの下にエコツアープログラムの活性化を目論んでいるが、一過性のものにとどまることなく、その取り組みを少しずつでも推進、継続していくことが大切である。推進していくにあたって継続的なアドバイスや支援が必要な場合には、川嶋から神戸や大阪を拠点としている専門家たちを紹介することもできる。「六甲山・摩耶山」ならではエコツーリズムの確立を、ぜひ目指して欲しい。

1-4-5. 一般社団法人大山観光局（鳥取県大山町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】16,750人（5714世帯）

【面積】189.83km²

【主な産業】

- ・主な産業は、農業・畜産・漁業・観光であり、農畜産品としては、水稻のほか、ブロッコリー・白ねぎ・スイカ・メロン・二十世紀梨・ゴールド二十世紀梨・りんご・日本茶・紅茶・畜産品・芝・種苗類・葉タバコ・生乳・プロイラー・豚ほか、最近ではブルーベリーなども観光農園として好評。
- ・また、日本海に面した地域では漁業も盛んで、沿岸漁業によりサザエ・ヒラメ・ハマチ・タイ・アジなどのほか、ウニ・板ワカメは特産品としても有名。観光は、国立公園大山が中心となっており、大山寺や大山山神社などの神社仏閣や名所旧跡、またスキー場や登山道・散策コースなど多様な観光資源がある。

【自然と観光資源】

- ・日本海から大山山頂を含む当町は、まさに海拔0mから1709mまで、海と山の双方の恵みをたっぷりいただいた自然豊かな立地で、海と山をつなぐ中腹部では溪流風情と高原風情を楽しめるなど、町内全域が癒しの楽園さながらに、全国でも類を見ない好環境となっている。
- ・近畿山陽圏からの交通アクセスも良く、米子自動車道、山陰自動車道と連結する国道9号線が東西に大動脈として走り、大阪・大山町間を車で約3時間で結んでいる。さらには山陰の玄関口である米子空港までも一般道にて約40分と至便である
- ・広域観光の視野からは、大山隠岐国立公園の中心地として、また日本海沿いに展開する山陰海岸線観光の中心地として、魅力あふれる近隣観光地との連携をより深め、来訪者の皆様へのサービス向上、ホスピタリティの向上につとめている

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

【背景】

- ・伯耆国大山開山1300年祭、日本遺産認定、国立公園満喫プロジェクトなど、大山地域の観光振興の追い風が吹くなかで、訪れたお客様に地域を楽しんで頂くための商品づくりが急務。
- ・大山は、海から山までの距離が近く、多様な自然アクティビティの展開が可能。
- ・町としても、大山エコトラックとして、自転車や登山・カヌーなど、自然を活かしたエコツーリズムを推進していくプログラムを製作中。
- ・大山観光局が出資をして、ツーリズムを推進する組織として、株式会社さんどうを設立するなど、推進体制も整いつつある。
- ・来年春以降に向けて、商品づくりをキックオフする上で、有識者のアドバイスを頂きながら大山の強みを活かした商品づくりの方向性を定め、商品開発をスムーズにすすめていきたい状況。

【地域課題】

- ・大山の自然資源を活かした体験型商品の不足
- ・外国人に対応した受け入れ体制、商品の不足
- ・地域内を移動する交通インフラの未整備
- ・地域の一体的な観光情報の取りまとめと発信の不足

【申請目的】

- ・これから、インバウンドも意識して、自転車やカヌーなどを活かした体験商品をつくっていく上で、モデルケースを作られている有識者のアドバイスを聞き、商品開発を進めていきたい。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 9 日（木）～平成 29 年 3 月 10 日（金）
場 所	鳥取県西伯郡大山町
アドバイザー	山田拓氏（株式会社美ら地球）
参加者	計 24 名 大山観光局（7 名） 大山町観光商工課（2 名） 大山町地方創生事務局（2 名） 鳥取県地域振興局西部観光商工課大山振興室（1 名） 環境省米子自然環境事務所（3 名） 大山寺郵便局（1 名） 鳥取銀行名和支店（1 名） （株）さんどう（2 名） みずのたね（1 名） 大山さんを守る会（1 名） 大山寺自治会（1 名） 森の国（2 名）
スケジュール・方法	【1 日目】 移動、大山町役場個別ヒアリング、大山観光局個別ヒアリング、 （株）さんどう個別ヒアリング、視察、講演会、交流会 【2 日目】 アドバイザーによる提案プレゼン（大山町役場）、移動

(3) アドバイスの内容（議事録）

【SATOYAMA EXPERIENCE の紹介】

SATOYAMA EXPERIENCE とは、山田拓氏を中心となり制作した日本が誇る里山文化と世界を繋ぎ、フィールドでのアクティビティを体験するための web サイト。

里山で感じる事ができる、本質的な暮らし。まずは、それを体験できるガイドツアーとして、2010 年に飛騨里山サイクリングをスタートし、世界中から集まるゲストに飛騨の日常を案内してきた。新しく生まれ変わった SATOYAMA EXPERIENCE では、里山に受け継がれてきた文化や歴史を体験できる多くのプログラムを取り揃えている。

暮らしと旅を結ぶツアーを通して、そこでしか体験できない特別な時間を楽しめるツアーとして注目を集めている。

【市場調査の考え方とは？】

「市場規模＝予約件数×一組の人数×単価」が基本である。

<予約件数>

年間においてどれくらいの予約件数を確保できるか（新規＋リピーター）

<一組の人数>

一組の人数、1回の催行で受け入れられる人数は何人が適正か

<単価>

顧客の視点で受け入れられる価格帯はどのあたりか

コストを積算し、どの程度の単価でなら自立を目指せるのか

【商品企画マーケティングの考え方とは？】

1. 商品やサービスを作り出すときのマーケティングの考え方は、釣りとして考えるとわかりやすい。
2. 釣りたい魚はどんな魚か？
3. どれだけ釣ればハッピーか？
4. 釣りたい魚は自分が釣りたいだけいるのか？
5. 釣りたい魚を釣るための仕掛けは何か？来て欲しい顧客が望んでいる価値とは？
6. 釣りたい魚は釣られて幸せか？（顧客満足度の把握）
7. 釣りの成果を定期的に確認しているか？

【顧客満足度を高めることとは？】

顧客満足度の高め方には、以下、2つの考え方がある。

1. 来た人に喜んでもらう
2. 喜んで貰える人に来てもらう

例えば、多言語化について、地域として、顧客満足度を高めるために、どこまで多言語化した情報を整備するかという議論がある。ターゲット次第であるが、旅慣れた人は英語くらい話せる。旅慣れた人をターゲットにする場合は、英語だけで十分である。

【ビジョンの大切さ】

地域の観光ビジョンの策定がとても大事である。

- ・ どんな人が
- ・ どのくらい来てくれて
- ・ どのくらい滞在して
- ・ 何を楽しんでいるのか

などについて、100年後の大山町について、関係者を巻き込んで、地域ビジョンを明確化するべきである。

【その他、大山観光への提言】

- ・ 場所としての潜在価値を感じる。大山から海の景色が美しく、漁村もあり、温泉地もある。農村景観を活用した、自然資源大山と海の農村景観資源をつかって、提供できると良い。
- ・ 立地上、アジア寄りの集客になっていると思うが、アジアマーケットだけでなく、経済的貢献をしてくれるような旅慣れた人たちを視野に入れるべきと感じる。長期滞在できる旅慣れたターゲット層。旅行業界では、フランスとシンガポールの市場を抑えることが重要。フランス人観光客の多くは人と違う事が好きな傾向がある。

- 山田氏の SATOYAMA EXPERIENCE できども、軌道にのるまでに数年以上かかっており、何事にも行政等関係機関が一体となって足並みをそろえて長期的な視野で取り組まなければ成果がでないことを感じた。



大山町役場 個別ヒアリング 3/9 13:00～



大山観光局 個別ヒアリング 3/9 14:00～



(株)さんどう 個別ヒアリング 3/9 15:00～



講演会 3/9 18:00～



山田拓氏 提案及びプレゼン 3/10 9:00～

(4) アドバイザーの派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ ビジョン策定の必要性について関係者間で、共通理解ができた。
- ・ 商品やサービス企画の際に、考えるべきことをイメージできるようになった。

2) 今後、期待される効果

- ・ インバウンド観光の体制づくり
- ・ 他地域のエコツアーへの自主参加・視察
- ・ 行政との連携・情報共有

3) 今後の取り組み

- ・ 地域ビジョン（大山にぎわいプロジェクトグランドデザイン）のブラッシュアップ
- ・ ターゲットにあわせた新商品、新サービスの企画

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・ SATOYAMA EXPERIENCE
 - 外国人観光客>日本人観光客

2) その他感想

- ・ 地域ビジョンをもち、地域内で共有することの大切さを学んだ。既に策定している「大山にぎわいプロジェクトグランドデザイン」について、今後も継続的に議論して、100年後の大山の姿について、地域の人々とブラッシュアップをしていきたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

山田 拓氏（株式会社美ら地球）

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

②課題

現状の当該エリアの主だった課題は以下と感じた。

- 長期ビジョンの欠如
- 関係者間の信頼関係の欠如
- 目的が不明確な事業が推進されている

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

地域資源は言わずと知れた大山エリアの大自然。インバウンドツーリズムを加味する場合は、素晴らしい国立公園エリアと海辺との距離感や瓦の色が整った農村、漁村集落も十分魅力的な地域資源であると言える。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

欧米豪を中心とした外国人旅行視点は、既に全国各地のローカルエリアに目が向いているが、それらのニーズと対峙しているエリアは圧倒的に少ない。このエリアは大山といった山間エリアと漁村エリア、皆生温泉といった外国人が魅力を感じる地域資源が比較的コンパクトに集積しており、現状あまり活用されていないように感じられるから。

3) アドバイス（講義等）の概要

二日間にわたり、以下の活動を実施した。

- 地域関係者対象の講演
- 地域資源インスペクション
- 個別 QA セッション
 - 大山町役場
 - 大山観光局
 - (株) さんどう
- 全体 QA セッション

地域関係者向けの講演要旨は以下の通り。

- SATOYAMA EXPERIENCE の概要
- 世界のツーリズム事情
- 美ら地球が提唱するエコツーリズム方法論

参加者の中には、大山エリアでの国内観光客の賑わいが減り、今後の新たな方向性を探っている方々

も少なからず存在し、外国人の目から見ると、地域住民からは当たり前で価値を感じられないような地域の日常でも興味の対象となることを知り、同様の方向性を当該エリアでも検討できるのではとの機運が少し生じたような感じであった。

QA セッション等では、若手関係者からは具体的なビジネス手法やプロモーション手法などに関する多くの質問が出た。

それに対し、DMO のあるべき姿や、マーケティングの基本的な考え方、多岐にわたるニーズが顕在化するインバウンドマーケットにおけるターゲティングの考え方など、具体的な質問に対して、時間をかけてアドバイスした。

着地型ツアー事業についても、事業立ち上げ時の資金調達法や集客の流れに関する質問も多く、これらも自社で取り組んできた実践内容を惜しみなく共有し、当該エリアでの立ち上がりを支援した。

地域おこし協力隊や観光局の子会社などには、比較的若手の職員が集っているが、それらの人材と役員クラスや観光産業のキーマンとの間の意思疎通が円滑に進んでおらず、予算や可能性がありながら、本来推進すべきことが思い通りに進んでないように感じた。

若手関係者の中には、上層部に自分たちの思いが伝わらないもどかしさを感じている側面もあったが、地域に根付くために、発言権を得られるように信頼を獲得することに注力すればと助言を付与した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

該当なし

②全体構想策定への意向について

該当なし

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

該当なし

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

豊富な資源を有し、早いタイミングで観光局が組織されていることは全国的には恵まれている状況にあると感じられるため、本来向き合い取り組むべきことを明確化し、関係者と共有し、地域の衰退を減速させる本質的なツーリズムが導入されることを期待する。

地域のツーリズムのビジョンが描かれていないことや、ターゲット顧客の選定が曖昧なところが、根本原因と考えられるが、大上段に構えてこれらを描こうとすると時間も労力も要するため、まずは、現在動いている若手関係者による小さくても何らかの新たな成功が生み出されることに注力すれば良いのではと思う。

現状、リーダーシップが欠如しているようにも感じられるため、地域のコンセンサスを醸成するために、外部コーディネータの投入も視野に入れても良いように感じた。

恵まれた環境でめぐまれた条件を持っているので、踏ん張って、やり続けて、新たな方向性を見出し、てほしいと切に感じている。

1-4-6. 「こもりくの森」準備会（福岡県みやこ町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 20,454 人

【面積】 151.28 km²

【地勢】

みやこ町は福岡県の北東部、行橋市の南西側に位置し筑豊地方と隣接している。南北に長く、北側は北九州市と隣接し、南側は中津市と隣接して大分県との県境を成している。旧犀川町南部は英彦山の麓部にあり、谷や山地が多い。行橋市に隣接する地域や旧豊津・勝山町域は京都平野の田園地帯であり、今川や祓川が流れている。また北部にはカルスト台地の平尾台がある。

【気候、自然】

気候は比較的温暖で、平均気温 15.8℃、平均降水量 1716mm。平野部の田園地帯から山地帯までの連なりとなっている。

【歴史】

みやこ町は遺跡や遺物などが多くある。豊前国の国府跡や国分寺跡も豊津地区で発見されており、豊前国の中心地だったとされている。現在、国府跡地は豊前国府跡公園として整備されている。1866年、第二次長州征伐により攻撃を受けた小倉藩が小倉城に火を放ち、城から撤退。のち小倉藩は藩庁を現在の旧豊津町に新設した。豊津陣屋。1871年の廃藩置県で豊津県の県庁が置かれたが、同年内に小倉県に編入され、のちに小倉県が福岡県に編入されたため福岡県内に組み入れられた。1876年に起こった秋月の乱で戦場となった。このとき戦死した士族の墓は現在、「秋月党戦士の墓」として残っている。

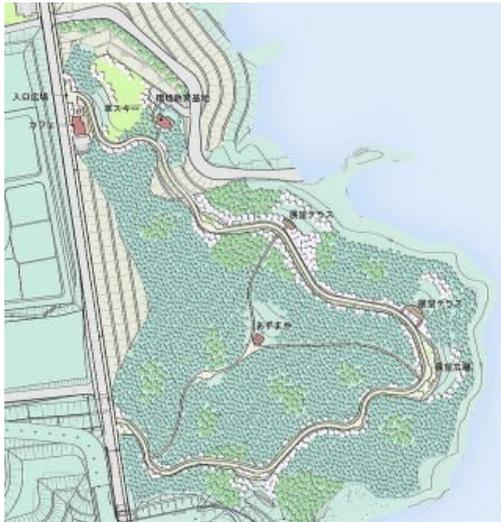
【観光】

森林浴 100 選に選ばれた蛇淵キャンプ場や桜の名所仲哀公園、八景山自然公園、千女房桜、15万本の菖蒲が咲く豊津花菖蒲公園など、自然環境を生かした施設が多い。また、古代人の古墳、律令制時代の豊前国府などの史跡が残っている。歴史民俗博物館ではみやこ町出身のドイツ文学者、小宮豊隆が所蔵していた夏目漱石自筆の書画や手紙などを展示している。

【地域資源の概要】

みやこ町の南部、犀川町の伊良原に、ダム開発に伴って、森林公園が建設されようとしている。地域ではこの公園を環境教育の情報発信基地と位置付け、周辺の自然や文化を生かした体験プログラムを行っていきたいと考えている。

公園内には『沈黙の春』、『センス・オブ・ワンダー』のレイチェル・カーソンを記念する施設が建設されるとともに、公園内では生態系のバランスのとれた森づくりを進めていく計画である。また、近辺には英彦山修験の鷹岨（たかくつ）権現や、江戸時代後期に建てられた永沼家住宅、地域を貫く祓川の源流部にある蛇淵（じゃぶち）の滝、そして無形民俗文化財である豊国楽（とよくにがく）、上伊良原神楽などがある。



現在整備中の森林公園の見取図。
 ここを環境教育の情報発信基地として、地域の自然や文化を生かした体験プログラムを開発、実施していきたい。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

本地域では、ダム建設に伴って、地域の再構築が進行している。私どもの下伊良原地域については、長年にわたる協議と検討の結果、地域で取り組む事業として、森林公園を整備し、環境教育事業を立ち上げていくこととなり、1年あまり後の公園のオープンに向けて、計画は最終段階を迎えている。

環境教育事業の構築については、これまでに色んな方の教えを乞い、現在は新たな人材も加わって、計画の具体的な検討と明確化を進めている。森林公園内で行う森づくり、自然体験や環境教育をどうするかという問題と合わせて、森林公園を情報発信基地ととらえ、現実には地域のいろいろな自然的、文化的資源を生かす形で体験ツアー、体験プログラムを開発していくことを構想している。

今後森林公園の管理、運営を担い、事業主体となる予定の「こもりく学舎」は、地域住民から構成されており、人生経験は豊富で、事業に対する意欲もあるが、環境教育やエコツーリズム、自然体験プログラムの開発などといった分野では初心者の方がほとんどである。だからといって、安易に外部の事業者やコンサルティングに依存したり、成功事例の模倣に走ったのでは、本当に持続性のある良い事業は生まれてこないだろうという洞察も持っている。

最近、森林公園の管理、運営や自然体験プログラムの開発等に経験のある人材が住民として加わり、専門的な知識や視点についてアドバイスをもらえるようになった。目下の大きな課題は、環境教育やエコツアーといった分野で、参加体験型の事業をどう構想、構築していくかという点と、これまで専門的な教育やトレーニングをあまり受けたことのない地域の方々に、優秀な自然案内人(インタープリター)、エコツアーガイドへと成長していってもらう点にあるといえる。

このような背景と課題を持つ私どもの地域へ、わが国の環境教育事業の草分け的存在である川嶋直氏に来ていただき、エコツーリズムの概念や、地域資源の生かし方、体験プログラムの作り方、インタープリテーションの手法、そして組織の運営方法等について高度なアドバイスをいただくことができればと切望し、今回の派遣申請となった。

現在、私どもの地域では、自然生態系の回復を理念とする森づくりを中心にした森林公園整備の計画が進行している。また、施設の建設計画と並行して、森林公園を基地とした、環境教育事業の立ち上げについても計画を進めている。今後、私どもの組織では、森林公園の管理、運営と、環境教育事業の運営が主な活動内容となる予定である。森林公園は森づくりのモデル地域であり、情報発信基地となり、体験プログラムを開発、実施していく。プログラムには地域資源を積極的に活用し、地域の人材を主体として、インタープリターやエコツーリズムガイドの養成を行っていく予定である。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 1 月 30 日（月）～平成 29 年 2 月 1 日（水）
場 所	福岡県京都郡みやこ町犀川下伊良原の森林公園建設予定地を中心とした地域 <ul style="list-style-type: none"> ・ 森林公園予定地 ・ 公民館 ・ コミュニティセンター ・ みやこ伊良原学園 ・ 蛇淵キャンプ場 ・ 鷹岨(たかくつ)権現 ・ みやこ町役場
アドバイザー	川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）
参 加 者	計 44 名 「こもりくの森」準備会メンバー（7名） 森林公園検討委員会（18名） みやこ町長 みやこ町総合政策課（4名） 福岡県伊良原ダム事務所（3名） みやこ伊良原学園（3名） 伊良原地域役員（6名） J A伊良原支店長 地域有志
スケジュール・方法	【1日目】 下伊良原に到着。森林公園予定地および周辺を視察。 計画の内容や現状について説明。意見交換等。 【2日目】 9:30「こもりくの森」準備会メンバーと会合。現状の確認や相談、アドバイス、レクチャー等。 14:00 みやこ町長を表敬訪問。環境事業等について意見交換。 19:00「こもりくの森」検討委員会、行政関係者を対象に講演ワークショップ。 【3日目】 後評

(3) アドバイスの内容（議事録）

「こもりくの森」準備会に対するレクチャーの中で

- ◆森林公園事業の中にはハード面（施設、森づくり等）とソフト面（体験プログラム、展示等）がある。
- ◆いちばん大事なのは、誰が、誰に対して、何をするために（ソフト）、何を整備するか（ハード）を考えることで、それが商品となる。
- ◆利益の少ない主催事業で実績を積み、利益の多い受託事業を受けられるように育っていく。
- ◆最初から完成形はつくれないので、プログラムの内容、人材育成、施設の整備など、一度にではなく、徐々に進めていく。
- ◆事業をスタートした時から徐々に向上していくようなプラン、資金繰りを考える。スタートした時がいちばん良くて、下降線をたどっていくことは避けたい。
- ◆マスツーリズムからエコツーリズムへ。発地型ツーリズムから着地型ツーリズムへ。
- ◆対象となるお客様の年齢層や人数等を想定して施設をつくり、参加して良かったと思って貰えるプログラムを開発する。
- ◆レイチェル・カーソンの名前を使うのであれば、その名に恥じないプログラムを開発する必要がある。
- ◆ソフト面はレベルアップが可能である。

森林公園検討委員や行政関係者、地域住民を対象とした講演、ワークショップの中で

- ◆キープ協会の環境教育事業の成り立ちについて。
- ◆PDCA サイクルでらせん状にレベルアップ。
- ◆ソフトもハードも少しずつ堅実に進歩する。
- ◆いつも誰かと協働を。自分に出来ないところを人に補ってもらう。
- ◆展示は手作り。いつでも新鮮で、レベルアップしていける。
- ◆環境教育施設に必要な、具体的な要素。 誰が、誰に対して、何を、どこで、いくらで、何のために、するか。
- ◆『センス・オブ・ワンダー』の一節の朗読、スライド。
- ◆マスツーリズムに対するエコツーリズム。エコツーリズムの目指すもの。考え、つくるのは皆さん。
- ◆発地型観光マスツーリズムと着地型エコツーリズムの違い。
- ◆エコツアーに必要な人材。 役者、脚本家、プロデューサー。

後評の中で

◆地域のポテンシャルの洗い出しを。



環境教育棟建設予定地



鷹岨(たかくつ)権現



「こもりくの森」準備会にレクチャー



地域関係者に講演、ワークショップ

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

これまで計画検討を進めてきた検討委員会のメンバーにとっては、環境教育事業の中味や運営の仕方、エコツーリズムの開発等について、より具体的に考える大きな機会となった。また、その他の人々にとっては、計画の中味について知ってもらう良い機会となった。今回のアドバイザー派遣受け入れにより、計画に対する地域の認知度が高まり、協力者や利用できる資源の拡大が期待される。

2) 今後、期待される効果

検討委員会のメンバーにとっては、何をどのように考えたらよいかという方針と、問題点等が強く意識されたと思うので、自分たちの計画をどのようなものにするかという点で検討が促進されるだろう。エコツーリズムという観点から、地域の自然や文化、そして人材を、どのように生かしていくかという議論が今後進むと思われる。また、今回参加いただいた行政関係者や周辺地域の方々とも、新たな協力関係が生じてくることが予想される。

3) 今後の取り組み

今回、地域の方々の、環境教育事業やエコツーリズムに対する理解が促進されたので、これを一つの足掛かりとして、これまでよりも具体的な計画の検討を進めていきたい。アドバイスに従い、一足飛びの進展ではなく、一歩ずつ着実な歩みを進めていけるようにしたい。地域のポテンシャルの洗い出しや、何が出来て何が出来ないかなど、一つひとつ明確にしていくとともに、この地域ならではの個性的な体験プログラムや体験ツアーの開発に向けて、徐々に進めていきたい。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

いちばん良かったのは、自分たちが抱えている現状について、経験豊富な川嶋氏が一緒になって考えてくれたことである。いつもは自分たちだけで考えているので、今回の様な機会を得て、いろんな部分で考えが促進され、補強された。

川嶋氏のスタイルは、正解を提供するのではなくて、環境教育とはこのようなものですよ、私はこのようにしてきましたよ、エコツーリズムとはこのようなものですよ、ということをつかり易く示し、自分たちでそれが出来るように促してくれるものだと思う。

何か特別な上手い方法を見つけるのではなく、わりと地道に、コツコツとつくり上げていくことを勧めておられるその姿には説得力があった。

2) その他感想

これまではハード面の検討が先行し中心を占めていたが、今後、プログラムや展示など、ソフト面に目を向けていく為の良い機会にもなったと思う。本来、ソフト面を考えて、それを実現するためにハード面を整備するのが良いのであるが、それが逆になっていたところがあり、今回、そのことに対して指摘もいただいたし、発想の改善をしていきたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏 (公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

ダム開発に伴う地域への補償として、みやこ町下伊良原地域には森林公園の建設が計画され、1～2年後の完成に向けて工事に着手している。地域ではこの公園を管理運営する組合を設立する予定であり、この森林公園を基地として環境教育事業を立ち上げ、伊良原全体の自然や文化や人材を生かした体験プログラムを開発、実施していく計画である。これまでは森林公園の建設に関わる検討に追われていたが、建設計画のあらまは固まりつつあり、今後は地域のポテンシャルの洗い出しや、具体的なプログラム、人材養成に関することなど、ソフト面の検討に入ろうとしている時期でもある。

「エコツーリズム」というキーワードを意識した地域の取組はまだほとんど始まっていない段階。

②課題

森林公園の施設については官設民営の道を目指しているが、公園事業や、森づくり、環境教育事業など、専門性を要する分野のことに対して、地域にこれまでの実績や蓄積があるわけではなく、これから築いていこうとしている段階。初めに森林公園の建設ありきでスタートしているようなところがあり、官にも大きく依存してここまで来ているので、計画に対して地域住民の意識が追いついていないところがあり、検討の対象もハード面に傾倒しているという印象を受けた。地域の事業を社会とのコミュニケーションと捉え、誰に来てもらってどのように過ごしてもらいたいのか、そのことにどんな価値があるのか、ということをもっともっと考えるようにしたら良いと思う。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

②上記地域資源に魅力を感じた理由

(①②合わせて)

森林公園内には米国の環境運動家であり作家としても有名なレイチェル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』の舞台になった別荘(米国・メイン州に現存)を模した施設が建てられるということなので、完成が楽しみである(別荘の持ち主である、カーソンの子孫の了解もすでに得ているということだった)。また、現在日本中の至る所で見られるような、手入れが行き届かず荒れてしまった人工林に、手を加え、生態系バランスのとれた豊かな森を育てる計画だということなので、環境教育のソフトも盛り込んだ森林公園として徹底して取り組めば、森づくりのモデル地となっていくのではないだろうか。森林公園以外にも、古い祠や滝や洞窟などの物語性のある場所や、キャンプ場やコミュニティセンター等の既存の施設もあるので、地域資源が不足しているという訳ではない。一方そういった有形のものばかりでなく、地域の食材を生かした料理や、親切な人々など、無形のものも資源となる、というかむしろそういったもののほうが地域に特性を与え、個性を生み出すものだと思う。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ 参加体験型の環境教育事業にはハード面（施設、森づくり等）とソフト面（体験プログラム、展示、そしてそれを支える人材）があり、この両面が合わさって、来訪者や参加者の価値ある体験を生み出すことが出来る。それを実現する為には、誰が、誰に対して、何をするか、その為は何を整備するか、というような大きな設計をまず最初に行い、それを実現するために具体的なレベルで考えを整理してゆくことが大切。
- ・ 事業をスタートした時から年月をかけて徐々に成長していくようなプランや資金計画を持つことが重要。スタート時が完成形ということではなく、プログラムの開発や人材育成等については、時間をかけて徐々に進めていくのが良いし、そうせざるをえないというのが現実であろう。特に、ソフト面は徐々にレベルアップしていくことが可能な領域である。ハード面は、目的が固定されたデザインで建設してしまうと後で変更できなくなることがあるので、後々のことまで考えて設計するとともに、後日別の用途でも使えるように、ある程度柔軟性を持たせたデザインとすることも大切である。
- ・ 地域のポテンシャルを洗い出す必要がある。それをやみくもに行うのではなく、何の為に事業を行うのか、何が大切なのかを常に問いながら、それに合致したポテンシャルを拾い上げていく。また、自分たちに必要だが不足しているものについては、外部からの資源や人材と協働することで補ってもらえるが、そういう助力が入って来やすい環境をつくることも大切。私（川嶋）の知る範囲でも、区長の緒方さんがこれまで培ってきた人脈（センス・オブ・ワンダーの訳者：上遠恵子氏、民俗学作家・イラストレーター：遠藤ケイ氏）等、様々な外部ポテンシャルがあるのでそれを活かすことが出来ると思う。
- ・ 着地型エコツーリズムの主体は地域の方々であるが、事業を成立させる為には、少なくとも役者、脚本家、プロデューサー（演劇で例えた場合）というような、複数の視点と役割が必要。来訪者や地域の方々活躍できる舞台をつくるために、協力者を見つけたり、そのような舞台が用意されていることをPRしたりすることも含めて考える必要がある。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は森林公園管理組合の設立と環境教育事業の立ち上げに向けて進んでいるところであり、そこから派生するエコツーリズムの全体構想にまで十分に検討が及んでいない。

②全体構想策定への意向について

目下は森林公園事業の運営見通しを得ることが先決であるが、将来的には周辺地域の自然や文化を生かす方向で考えている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

地域のポテンシャルを洗い出すこと。 エコツーリズムがもたらすメリット（デメリットも）を意識すること。エコツーリズムと地域振興を結びつけること。具体的な体験プログラムを構想すること。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

森林公園建設計画の検討が目前にあり、施設面に目が行きがちであるが、施設の整備を通じて、人々の「体験」を生み出そうとしているのだということを忘れないでほしい。この地域は、官主導で施設整備が進められており、そこに地域の声も取り入れられており、そういう点は、自分たちだけの人的・資金的なチカラだけで運営している（せざるを得ない）全国各地の自然学校と比較しても大変恵まれていることは忘れないで欲しい。施設デザインの検討にあたっては、誰が、誰に、何をするために、という具体的な体験プログラムを考えることで、どのようなデザインが良いか決まってくる。参加体験型の環境教育事業や、エコツーリズムの開発においては、施設の建設自体が目的ではなく、地域住民や来訪者が役者として活躍できる舞台をつくれるかどうか重要である。

プログラムの開発については、地域おこし協力隊などですでに経験のある人材も入っているので、これまでに培ってきた町外の環境教育分野の様々な蓄積やつながりを活かしながら、基本的なレパトリーをつくり、参加者のフィードバックを大切に生かしながらレベルアップを図ってもらいたい。

森づくりに関しては、自然生態系を相手にした専門的な取り組みであり、まさにレイチェル・カーソンが『沈黙の春』で指摘したように、近視眼的な考えを避け、息の長い未来の森づくりを指向するのが良いと思う。すでに蓄積されている科学的・実践的なデータを利用し、不足する部分は実践的研究で補うなど、試行錯誤を積み重ねていくことが、環境教育基地を標榜しているこの地域の財産になっていくと思われる。

人材の養成については、先進例に学びながらも、模倣の域にとどまらぬよう、試行錯誤を積み重ねてほしい。特に、インタープリテーションやガイディングにおいて、コミュニケーション能力を磨いていくことはとても大切で、専門的なトレーニングの仕組みを持つようにするのが良いと思う。また、世代交代を意識したメンバー構成にすることや、地域外からも協力者が入って来やすい環境を整えることも大切。そういう意味では、自分たちの取り組みが、第三者にどのように受け止められるか、という視点は大変重要なポイントである。プログラムのモニタリングを行うことや、専門家の意見をもらうことは、自分たちの現状に気づく良い機会となるだろう。

1-4-7. 南大隅町企画観光課（鹿児島県南大隅町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】7,757人

【面積】213.57 km²

【地勢】

鹿児島県大隅半島の南部に位置し、錦江湾と太平洋に面している。豊かな自然を生かした農業や畜産などの一次産業が主産業であり、海に面した地域では漁業も盛んである。起伏の多い地形が多く、居住面積割合は低い。

【気候、自然】

北緯31度を通る佐多岬周辺を含め、全体的に温暖な気候である。亜熱帯植物が生い茂る佐多地区にはソテツ自生地も存在し、雄川が流れる根占地区はヘゴ自生地の北限でもある。雄大な自然が生み出す清涼な空気と水があり、南国情緒が溢れている。

【歴史】

旧根占町と旧佐多町が平成17年3月31日に合併し誕生。約450年前、本町を流れる雄川河口の港で貿易を行っていた唐人と南蛮人による勢力争いを鎮めるため、当時の領主であった祢寝（ねじめ）氏が開催したこととされる、南蛮船（龍船）競争が現代に再現された「ドラゴンボートフェスティバル」をはじめ、佐多の「御崎祭り」など、文化的価値の高いイベントが催されている。また、西郷南洲翁宿泊の家や薩英戦争時の砲台跡地が残る台場公園、佐多旧薬園等の歴史的建造物もあり、その中でも、2基の鳥居の並ぶ諏訪神社は、本殿の造りやその年代も踏まえて貴重なものである。

【観光】

数々の自然を生かした観光の中で代表的なものの中に、北緯31度線上に位置する佐多岬灯台がある。この灯台はイギリス人の設計により明治4年に完成。昭和20年の空襲で焼失し、現在の灯台は昭和25年に復旧したもの。また、近年注目を浴びている雄川の滝はエメラルドグリーンに輝く滝つぼと、独特の壁面を有した滝で、その神秘的な景色が人々を魅了する。また、南大隅町は壮大なロケーションを活かしたビュースポットが多数存在し、パノラマパーク西原台やゴールドビーチ大浜などはその代表である。

【地域資源の概要】

特産品では亜熱帯と温帯の環境の中で熟成されるタンカンをはじめとする柑橘類やマンゴー、県のブランド指定をされている春ばれいしょ等があり、その中でも特に根占沖で養殖された「黄金ねじめカンパチ」は「かごしまのさかな」として認定されるなど、県内外で高い評価を得ている。また、ねじめびわ茶や佐多シャーベット、たんかん・塩ソフトクリームなども、南大隅町の土産品として喜ばれている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

平成30年の佐多岬リニューアルに向け、周辺地域の景観美化や環境整備に関する取り組みを実施しているところであるが、行政と地域とが協力して新しい観光の商品化に取り組むための手法やノウハウについて検討すること、また地域や観光関係者と共通意識を持つことを目的とする。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 2 月 27 日（月）～平成 29 年 3 月 2 日（木）
場 所	鹿児島県 肝属郡 南大隅町
ア ド バ イ ザ ー	吉見精二氏（地域観光プロデュースセンター代表）
参 加 者	計 10 名 <ul style="list-style-type: none"> ・ ツーリズム協議会副会長 ・ 物産協会会長 ・ 商工会会長、局長 ・ 観光協会会長 ・ 経済課 ・ 企画観光課から 3 名
スケジュール・方法	<p>南大隅町内における主要観光地の視察をはじめ、まだ整備の整っていない観光地の視察、飲食店経営者や生産者、地域住民（自治会長等）とのヒアリング等を通して得た情報を元に、最終段階で講演会を開催し、南大隅町内における観光関係者とのディベード形式による協議を実施した。その中で、今後の南大隅町の在り方や、自然を活用した観光の商品化に向けた取り組み等についてご指導いただいた。</p> <p>【1 日目】 15：20～18：00 現地視察 （雄川の滝、諏訪神社、なんたん市場、ねじめ温泉ネッピー館）</p> <p>【2 日目】 8：30～17：50 現地視察 （なんきゅうフェリー、佐多岬、田尻自治会、サウスマックス、大泊地区、さたでいランド、旧薬園、ゴールドビーチ大浜、道の駅ねじめ、ウミガメを守る会）</p> <p>【3 日目】 8：30～13：00 現地視察 （パノラマパーク西原台、辻岳、台場公園） 15：00～17：00 講義</p> <p>【4 日目】 8：30 役場挨拶、報告 9：00 空港へ</p>

(3) アドバイスの内容（議事録）

◆2月27日

- ・ 鹿児島空港に11時50分に到着し、南大隅町公用車(アテンド企画観光課日高)にて南大隅町へ向かう。道中、町の情報や、本事業中に視察していただく主要観光地等の資料をお目通しいただいた。また、口頭での質問に回答し、町の施策や方向性についても情報の提供を行った。
- ・ 15時に本庁へ到着し、町長（森田俊彦）表敬及び企画観光課長（竹野洋一）への挨拶と本事業の説明を行い、雄川の滝へ向かう。
- ・ 遊歩道を歩き、雄川の滝への視察を実施。導線上の不足した部分の指摘や、観光地としての在り方についてご検討いただく。その後、諏訪神社の成り立ち等説明しながら現地視察を行った。（並立鳥居や赤塗の話）
- ・ 廃校となった旧宮田小学校へ向かい、活用状況等を説明しながら、その貴重な立地条件等についてご講評いただく。
- ・ なんきゅうフェリー発着所へと向かい、フェリーの活用状況及び指宿市や南九州市との広域連携について説明後、同施設内にある合同会社岬を訪問し、鶴園さん（事務員）から、会社の経営状況や関連施設、また南大隅町の現状等についての情報をご提供いただいた。（ヒアリング）
- ・ 宿泊所である「ねじめ温泉ネッピー館」へ18時頃到着。館長（須崎さん）に、現在の運営形態に至るまでの経緯をご教示いただく中で、南大隅町で運営していくための苦労、努力等についてもお話しいただいた。（宿泊中の食事、温泉施設、また全体を通した施設運営形態等についての視察を兼ねる。）

◆2月28日

- ・ 宿泊所を8時30分に出発し、佐多岬へと向かう。佐多街道（海岸線）の景観美化や、伊座敷商店街の状況について講評をいただきながら、佐多地区の各集落の一部についても現地にて視察を実施。（伊座敷、島泊、尾波瀬、大泊）
- ・ 佐多岬ロードパークを通る中で、観光資源となりそうなモノについてアドバイスをいただく。「陸の孤島」と称し、離島のような感覚になる本エリアについての評価をいただいた。また、31度線モニタリング、エントランスも見ていただき、佐多岬の現状について視察した上でその価値にご講評をいただき、今後の観光地としての開発の仕方や、付帯施設の必要性等についてアドバイスをいただいた。併せて第二駐車場の不要性についてもコメントをいただく。
- ・ 田尻地区では、塩生産者（サウスマックス森さん）の作業場を訪れ、森さんから南大隅町で塩作りを始めたきっかけ、塩作りに対する想いを語っていただいた上で、若者の活気や可能性についてご講評いただく。また、体験型メニューに関する手法や、個人型観光の推奨をしていただいた。
- ・ さたでい号発着所にて田尻海岸の状況確認をし、田尻自治会長（濱田さん）とのヒアリングを実施。釣り客の民泊や田尻自治会の可能性を語っていただいた上で、地域の力の必要性やその価値についてご指導いただいた。
- ・ ホテル佐多岬の現状を視察し、佐多岬と直結するホテル経営の実態を確認した。また、大泊自治会長（田中さん）にもご足労いただき、大泊自治会の活動状況、帰省者等の情報についてご教示いただいた上で、自治会の活性化（自主活動）を促していただき、同時にその貴重さについてご教示いただいた。
- ・ 大泊から外之浦（とのうら）→間泊（まどまり）→竹之浦（たけのうら）と移動する中で、間泊にて地域住民と接触。単身世帯の増加や高齢化が進む町の中で、今なお残る自治コミュニティの存在を確認するとともに、その重要性について再確認した。
- ・ 浜尻海岸及び浜尻キャンプ場を視察。砂浜や、その形状等を評価していただき、この素晴らしい情景について、町からより多くの情報を発信することの必要性についてご指導いただく。
- ・ さたでいランドでは、週末営業の実態や、観光客の入れ込み状況をご説明し、少子化が進む社会の中での施設現状をお伝えし、視察していただいた。

- ・佐多旧薬園を視察後、自転車競技場へと向かい、狐塚公園の立地条件の悪さや活用しにくい旨の評価をいただく。また、なんたん市場の現状を把握。
- ・渚を守る会（中村さん、寺田さん、西さん【自治会長】、前田さん）とのヒアリングを実施し、ウミガメ保護に関する活動内容を聞き取り調査した。その中で、会員が持っている構想を実施していく上でのアドバイスを頂戴し、また、夏休みを利用した長期滞在型の誘客促進のアイデアをいただく。同時に自然保護の観点からも、継続した活動の必要性を説かれ、行政との連携の必要性や、環境省を巻き込んだ活動を展開していくことを推奨された。

◆3月1日

- ・パノラマパーク西原台への視察を実施。錦江湾を一望できる環境及び、パノラマパーク西原台へのアクセス及び周辺の景観美化に関する事、また、サイン等の必要性についてアドバイスをいただく。
- ・辻岳への登山を実施。時間の都合により、短時間で歩ける登山道を選択したが、斜面が急すぎる点や、所要時間が短すぎる点を踏まえ、登山愛好家が楽しめる行程でないことをご指摘いただく反面、登山未経験者でも登ることに抵抗が無い点で評価いただいた。また、頂上の広さとその眺望の良さから、トレッキング等の推奨地とされた。サインや町の中心部からの案内が必要。
- ・味の大砲では、地元でとれる新鮮な食材や、店内からのロケーションの評価が高く、また、他にはないリーズナブル価格やボリュームに好評価をいただいた。

※講演会の実施

◆3月2日

- ・南大隅町役場へ事業の報告をして空港へ出発。道中、今後の南大隅町のやるべきこと、体制づくり、観光の商品化、交付金の活用方法等、昨日の講演会で出席者から得た情報等を交えた形でアドバイスしていただく。

◆講演会について

- ・大きな地域ブロックを形成した事業の取り組みの必要性。
- ・保全→それを活かした観光→地域振興のサイクル。
- ・「観光とは地域の良さを再発見すること」
- ・サイクリングに関して、周遊型（滞在型）の観光の仕方を検討。
- ・資源台帳の作成を推奨。
- ・テレビや雑誌等のメディアを活用した目立つアプローチの重要性。
- ・体験プログラムの開発。
- ・シーズンパンフレット作成を検討。
- ・「有名観光地でないのは魅力」
- ・「半島ネットワーク」ならぬものを作って過疎地域の活性化。
- ・「環錦江湾ツーリズムネットワーク」（鹿児島市、指宿市、霧島市、鹿屋市、垂水市、錦江町、南大隅町）
- ・国立公園満喫プロジェクトを活用して、小さなことからコツコツと。

○観光協会

- ・佐多岬、雄川の滝の再開発。
- ・西郷どんブレイクにより、鹿児島市内からこちらに足を運んでもらえるような仕掛けづくりの必要性。
- ・自転車競技場の活用。
- ・辺塚地域の資源（辺塚ランや辺塚照葉樹等）の貴重性。
- ・ボタニカルファクトリーの体験型。

○物産協会

- ・佐多岬、西郷どん、自然に力を注ぎたい。
- ・今まであった観光ルートの再構築もできるのでは？

○商工会

- ・ 観光客の受け入れ態勢が整っていない点。
- ・ ドラゴンボートの周知。
- ・ バイク、キャンプ（高級キャンプ）の特化。
- ・ 佐多岬にはロマンスがある。
- ・ 新たなモノを求める観光客、インバウンドが未開の地を求めている。
- ・ 個人客はリーズナブル傾向にある。

○ツーリズム協議会

- ・ 民泊の権利を取得したい。
- ・ 農業体験、織物体験。

○経済課

- ・ 商品としてモノができすぎていて、何かひとつに絞りにくい。
- ・ ふるさと納税にかわる仕組みづくり。

～まとめ～

○自然

- ・ ソテツ、ヘゴ、辺塚ラン

○体験

- ・ 塩づくり体験、織物体験、ボタニカルファクトリー

○滞在型

- ・ 農業、ウミガメ保護活動、自転車、民宿

○物語

- ・ 佐多地区、佐多岬

※プラン

- ・ ウミガメ保護活動にちなんで、長期滞在型の民泊の観光商品化。夏休みを活用し、子どもたちに保護活動を体験してもらおうというもの。
- ・ 佐多岬来訪者と民泊をセットにすることのモデル化を形成

※キーワード

- ・ 南大隅町ツーリズム（自分たちに合ったツーリズムの形）
- ・ 南大隅町スタイル（他にはないオリジナル性）
- ・ 地域自慢コンテスト（地域の情報発信の方法の多様化）

■現地視察、ヒアリングの様子



■講演会の様子



(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

民泊の実施の仕方、現在実施している活動からの観光商品化、またこれらの商品としてのモデル化等、具体的な活動形態を示唆することにより、今後の取り組みに対しての士気を高めるとともに、有名観光地でないことの魅力や可能性についてご講義いただいた。

2) 今後、期待される効果

既に地元住民が実施している自然保護活動を通じた観光商品のモデル化や、滞在型民泊の実施等。

3) 今後の取り組み

観光客を呼び込むための具体的な商品化の手法や、本町が持っている観光素材そのものを取り上げていただいたことにより、観光関係者にとって、エコツーリズムを通じた観光モデルの商品化が身近な目標であることを伝えられた。そのことにより、今後の取り組みに対しての士気を高め、より活発な地域活動や、幅広い範囲での活躍、また行政等との連携による事業の拡大等が期待される。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

有名観光地ではないことの魅力、大きく活動を実施するための方法（広域連携や情報配信等）、独自のスタイルの面白さ、物語（歴史背景）の重要性等。

2) その他感想

本町にはなかなか気づけない魅力や、現在存在している商品の良さに注目していただき、自然に関することや、自然を活用した本町全体の可能性を再発見できた。また、講習会の中で、観光関係者からたくさんのお情報や地域の声を収集することができた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

吉見 精二氏 (地域観光プロデュースセンター)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

南大隅町は、鹿児島県の大隅半島の南部にあり日本本土最南端の佐多岬を有し霧島錦江湾国立公園に属しており、平成 28 年に環境省の「国立公園満喫プロジェクト」の 8 つの国立公園の一つとしても選定されている。南大隅町でも、大隅半島のシンボリック存在である佐多岬整備を 2030 年完成に向けて進めている。これらの機会を捉え、新たな取組みにより交流人口を増やすべくエコツーリズム等の取組みを始めようと動き出している。

②課題

そこで、南大隅町が観光客の増大による地域活性化を図るためには、従来型観光にこだわらず新しいニーズに応えられる地域の資源を活かした「自然ふれあい」型の交流ツーリズムの開発と、地域の自然や文化の保全に対して地域住民の意識を高めるエコツーリズム推進に取り組むことが賢明な策である。そこで、「美しい自然と共存する」魅力あふれる地域づくりと観光の基盤をつくる必要があり、観光コンテンツの整理や周遊ルートの開発、情報発信の方法、それを支える地域住民のネットワーク化などが課題として挙げられる。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

【自然・体験・学習の資源】

- ・「雄川の滝遊歩道」のウォーク：1.2 キロ所要 90 分、高低差少なく誰にでも歩ける。
- ・「大浜海岸（ウミガメ産卵地）：開聞岳を向かいに錦江湾に沈む夕日は素晴らしい。
- ・「佐多岬展望台」：有料道路が無料化され大駐車場が完備される。日本本土最南端。
- ・「辻岳」登山：標高千メートル弱で西口登山道から 40 分で頂上。急な坂道。展望絶景。

【環境保全・暮らしの資源】

- ・「サウスマックス」：佐多岬の海水を月 2 回くみ上げての窯と薪を使った塩づくり。
- ・「渚を守る会」：ウミガメを守る活動を集落の人たちがボランティアで展開している。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

海・山・海浜の里、まち近くの農の活動など、南大隅町ならではの自然に恵まれている。一般観光の資源として知られているものには佐多岬があるが、その他の魅力的な資源は手に取って見せられていない。そして、その魅力的な資源は多彩に存在する。そこが南大隅町の隠れた魅力であり、可能性を秘めているといえる。

3) アドバイス（講義等）の概要

【研究会出席者】

「南大隅町のエコツーリズム等の取組みの在り方研究会」として開催。町長はじめ議会議員、議員にも出席を願い、観光協会、物産協会、商工会の各会長職、事務局、地域住民としてはツーリズム協議会から、町からは企画観光課長、経済課課長補佐が出席された。

【研究会でのアドバイス】

エコツーリズム推進による地域活性化を目指そう！

最初に話題提供として、パワーポイントでプレゼン。

「地域資源を活用したエコツーリズムを成功に導くポイント」

～「南大隅町ならではのエコツーリズムの未来可能性について」～を30分お話した。

内容は概ね、

- ・地域を元気にするエコツーリズムの価値
- ・日本型地域づくりエコツーリズムの事例紹介～飯能市、南丹市美山、滋賀県内
- ・地域資源「宝探し」の手法と活用
- ・エコツーリズム推進DMOの構築
- ・国の地域活性化支援策の活用について説明

南大隅町の着地型旅行商品化整理をしてみよう！

ワークショップ的形式（ワークシート活用）による全員発表

～みんなで“地域自慢を”しよう！の意見発表～を60分

特に、ビジョン・将来展望（未来図）について重点的に問いかけ意見を求めた。

参加者全員が、各分野での活動報告や現状課題と未来の抱負を述べた。

ワークショップの後の「アドバイス」

～アイデアを具現化しよう！「アドバイスのポイント」～

- ・「南大隅町の地域観光には未来可能性がある！」。しかし、魅力ある地域資源が活かされているか？新しい観光の潮流「ニューツーリズム」に対応できているか？
- ・交流人口の拡大による地域活性化のためには、地域の総合的魅力的創造・活用が必要で、特に地域人材の活用がポイントである。そして、行政主導で地域のあらゆる主体とのコラボレーション（協働）による観光地域づくりに取り組む必要がある。
- ・新しい観光のニーズに対応できる地域の伝統文化・食の活用による「体験交流型」のプログラムの充実化と、新しい「物語づくり」に取り組むことが重要であること。
- ・それらを旅行商品化して集客を目的としたサイトの構築によりダイレクトに集客する「南大隅版DMO」プラットフォームを構築することが望まれること。

講師から「南大隅町の未来に託す提案」

- ・これらを進めるプロセスとして、地域をまるごと巻き込んだ「南大隅町の観光創生未来塾」の開講により、地域人財の発掘と育成を図ることを提案した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現段階では、エコツーリズム推進のファーストステップを踏み出した段階である。

②全体構想策定への意向について

エコツーリズムアドバイザー派遣申請では、「意向はない」とされているが、今回の研究会でのアドバイスや意見交換の内容からは、「全体構想策定」にも関心があった。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

「国立公園満喫プロジェクト」の8つの国立公園の一つとして選定された地域に含まれていることは、いま、「エコツーリズム推進全体構想」の認定を受けて本格的にエコツーリズム推進に取り組む地域として相応しく地域活性化につながるもので、機運が高まるようアドバイスした。今後、期待が持てる行政の推進体制があると評価。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

最初の一步を踏み出してほしい！

いま、地方創生のなかで「地域は観光に頼らなければやっていけない！」とも言われている。とくに、地方は人口減少などの直面する課題、時代の流れをどう受け止めるのか。南大隅町も同様の課題を抱えている。しかし、南大隅町には「豊かで個性的な自然がある。南大隅町ならではの固有の地域文化がある」ことを活かして、尖がった取り組みを推進することで、成功のモデル事例の創出に踏み出すべき絶好の時期。

「南大隅型エコツーリズム」の創出を！

それには、エコツーリズムの取組みが基本理念として明確な目標になる。すなわち、エコツーリズム推進とは、①環境保全×②観光振興×③地域振興のトライアングル・円運動により南大隅型のまちを元気にしていく運動である。

南大隅型のエコツーリズムとは、①身近な自然、②歴史、③生活文化をテーマにしたエコツアーを創り上げることである。そして、地域の人々が持つ古くから伝承されてきた生活の知恵、衣食住の技術を「宝もの」として再発掘し、磨き上げて、活用していくことだ。地域の人たちが主役になってふれあいを楽しみ、エコツーリズムの楽しさを感じられるエコツアーを地域の人たちと行政が協働による創意で創り上げて行ってほしい。

「エコツーリズム推進全体構想」の認定にもトライを！

そのためにも、地域の未来の羅針盤として「エコツーリズム推進全体構想」の認定の取組みにも着手して欲しい。地域の環境保全とエコツーリズム推進の両輪による地域活性化を目指すことを提案する。

住民参加型の「地域まるごとエコツーリズム」を！

まず、「地域まるごとエコツーリズム」推進を町内で運動化することが最初の一步。地域住民の日々の営みが元気でなければ、そとの人たちは魅力を感じないでしょうし、訪れはしない。「交流型ツーリズム」の取組みが、「地方の元気創造」の好循環を創出する。地域の暮らしの誇りを伝え、地域住民と来訪者の出会いの場づくりを第一義とする「南大隅型エコツーリズム」の創出を期待する。

着地型観光推進のプラットフォーム機能の構築を！

最後に、地域の魅力を伝えて地域に人を呼び込む流通を創出するための情報発信、着地型旅行商品の販売システム化、基盤構築を進める必要がある。持続的な事業推進へとつなげるための組織として、地域の着地型観光推進のプラットフォーム機能を構築することが望まれる。いわゆる「地域版DMOの構築」による「地域創造観光」の推進に大胆に取り組んでほしいものと願っている。

1-4-8. 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会

(鹿児島県奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

奄美大島は奄美群島最大の島で、面積は 712.52 km² で全群島面積の 57.9%、人口は 62,716 人で群島総人口の 54.8% を占める扇形の島であり、現在、奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町の 1 市 2 町 2 村からなっている。群島の首都的性格を有する奄美市名瀬は、奄美大島の西北部に位置し、航路距離で鹿児島港から 383 km、那覇港から 352 km の地点にあり、名実共に群島の政治、経済、交通の中心地である。

この島は、四万十帯に属する堆積岩類（砂岩、頁岩）がほぼ全域にわたって広く分布している。山岳中の最高峰は湯湾岳（694m）で、島の中央からやや西側にそびえ立っており、油井岳、松長山、鳥ヶ峰岳等の 400m 以上の山岳とともに本島の脊柱部を構成している。海岸線は、概して良湾良港に恵まれている。なかでも名瀬港は群島唯一の重要港湾で、貨客船の出入が頻繁であり、30,000 トン級の岸壁 1 バースが平成 16 年 4 月供用され 10,000 トン級の岸壁 2 バースが整備されているほか、クルージング需要に対応するための整備が進められるとともに、港湾機能の充実を図るため本港地区の耐震岸壁及び沖防波堤の整備が進められている。

空港は、奄美市笠利町に奄美空港が昭和 63 年 7 月 10 日開港（旧空港：昭和 39 年 6 月 1 日開港）し、東京（羽田）－奄美間、大阪（伊丹）－奄美間、平成 26 年 7 月 1 日より、東京（成田）－奄美間を LCC（格安航空会社）がジェット機で就航しているほか、鹿児島－奄美間、那覇－奄美間、福岡－奄美間、群島内の各空港との間には DHC-8 型機及びサブ機が就航している。

産業としては、さとうきび、野菜、果樹、肉用牛を主体とした農業と黒糖焼酎、大島紬が主なものであり、特産物としては大島紬、たんかん、パッションフルーツ、マンゴー、黒糖焼酎等がある。また、瀬戸内町、宇検村では、真珠、クロマグロ等の魚類の養殖が行われている。自然は、猛毒で知られているハブや、天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ、オオトラツグミ、ルリカケス（昭和 40 年 5 月鹿児島県鳥に指定）、アカヒゲ、オカヤドカリ、アマミイシカワガエルなどの他、絶滅危惧種のリュウキュウアユ、アマミヤマシギ、アマミマルバネクワガタや奄美大島の固有種であるアマミセイシカ、アマミエビネなど、貴重な動植物が多く生息している

※【平成 27 年度奄美群島の概況より抜粋】

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

奄美群島 12 市町村は、地域関係者が共通の認識のもと取組を推進するために、エコツーリズム推進の指針となる「奄美群島エコツーリズム推進全体構想」を作成し、平成 29 年 2 月 7 日に認定をいただいたところである。また、同年 3 月 7 日には、奄美群島の豊かな自然や多様な文化が評価され、世界自然遺産登録の保護担保措置となる国内 34 番目の国立公園に指定された。また、その豊かな自然や多様な文化をより理解しやすく伝えるために重要なエコツアーガイドの育成に取り組み、「奄美群島エコツ

アーガイド認定制度」を創設し、エコツアーガイドの社会的地位確立に繋がるよう努めている。

奄美群島国立公園の指定に加え、世界自然遺産登録が実現すると、観光入込客が大幅に増加し、観光振興・地域振興・経済効果に多大な影響が予想される。一方で過剰利用による野生動植物に対する影響や夜間の林道での高速走行によるロードキル、または盗掘・採集による希少な野生生物への影響も懸念されている。

奄美群島が徐々に注目されつつある中、エコツアー利用者のニーズも多様化しており、地域の魅力が損なわれないためにもエコツアーガイドの資質が非常に重要となっている。ルールの遵守や知識の提供はもとより、利用者に対しては「ホスピタリティー」や「インタープリテーション」の実践がリピーターづくりには欠かせない。

このように奄美群島にとって追い風となる出来事がある一方、課題も山積している中、先進地域である尾瀬地域でガイドとして活躍されており、アドバイザーも務める安類氏に「エコツアーガイドの役割」や実際にガイドする上で必要な知識や技術・手法等についてアドバイスをいただく機会を設けたい。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 2 日（木）～平成 29 年 3 月 4 日（土）
場 所	鹿児島県奄美大島一円 講演会：AiAi 広場（奄美市名瀬末広町 14-10） 視察：湯湾岳（大島郡宇検村及び大和村周辺）、奄美南部ツアー（大島郡瀬戸内町周辺）
ア ド バ イ ザ ー	安類 智仁氏 （NPO 法人片品・山と森の学校 副代表、尾瀬ガイド協会 専務理事）
参 加 者	計 29 名 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会 登録ガイド 10 名 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会 研修生 8 名 行政関係者 8 名 事務局 3 名
ス ケ ジ ュ ー ル	【1 日目】 14：30 奄美大島着 16：00～ 事前打ち合わせ@奄美群島広域事務組合 【2 日目】 09：30～ 散策@湯湾岳 15：00～ 講演会@AiAiひろば2階会議室 演題：「ガイドに求められる役割とは？～尾瀬認定ガイドと考える～」 【3 日目】 09：00～ 奄美南部ツアー@大島郡瀬戸内町一円

(3) アドバイスの内容（議事録）

【ガイドに求められる役割】

顧客満足度、滞在日数、リピート率の向上

- お客様のニーズの把握が重要（事前に聞き取りを行う）
- 事前にメールや電話等でやり取りをする（希望を聞く）
- メールのやり取りは多い時で1日200件以上（素早い対応が安心感に繋がる）
- ナイトハイキング等は滞在日数の増加に繋がる（地域にお金が落ちる）

安全・行程管理

- エージェントのガイド依頼は時間厳守（決められた行程管理）
- ガイドレシオ（ガイドと参加者の比率）は安全管理上や満足度向上の点からも重要（理想は1:8）
- 安全管理マニュアル・防災マップ等の活用（緊急時に備えて）
- 繁忙期には安全対策員を雇用（ガイド事業者の互助会で共同出資）

地域の魅力PR、地域づくり

- 地域の名人とコラボレーションしたプログラムづくり（利用者と地域を結ぶことで、地域の魅力をPR）
- 主役はガイドではなく、お客様（ガイドは利用者と地域、地域と自然を結ぶ橋渡し役）

地域資源への配慮・モニタリング

- 固有種・特産種が多い地域（自然保護の意識が高いガイド・利用者）
- 利用のルールを守ったうえでの案内が必要（大半が国立公園特別保護地区）
- モニタリングの重要性（毎日歩くことで変化に気づき、環境保全に努める）
- 尾瀬学校の取り組み（環境教育として地域の自然資源の魅力と保全の重要性を伝える）

【利用と保全の仕組みづくり】

地域の自然保護の重要性

- 自然＝財産 財産は保護・適切な利用・独り占めしないことなどが必要
- ツキノワグマの保護（例：定点観察調査・食性調査・センサーカメラ調査・植物資源調査を実施）
- 調査結果を活かす（どんぐりが豊作な年の翌年は子熊がたくさん生まれる）
→翌年の利用対策ができる
- 尾瀬ビジョン「みんなの尾瀬をみんなで守りみんなで楽しむ」（多くの人に利用してもらい守る人を多く育てる）

ルール・マナーの遵守

- 木道は右側通行・動植物は採取禁止・外来種の侵入を防ぐ・ペットは持ち込まない・ごみは持ち帰るなど（解りやすく伝える）
- 日本で初めてのマイカー規制（マイカー規制＝入山規制ではない）
→渋滞が緩和されて入山者は快適となったため数は変わらない

利用と保全の調整

- 環境収容力と利用調整（1日の最大利用者数や1時間あたりの最大利用者数等から人や生態系に与える影響を算出する）→快適性が損なわれていないか？
- 入山者数のカウント（どれだけ利用されているか根拠が必要）
- 尾瀬は1日5,000人の利用が適正（5,000人を超える利用は1年に4日のみ）
- 「利用のルールを作ることが保護につながる」

○状況写真

【湯湾岳散策】



【講演会 1】



【講演会 2】



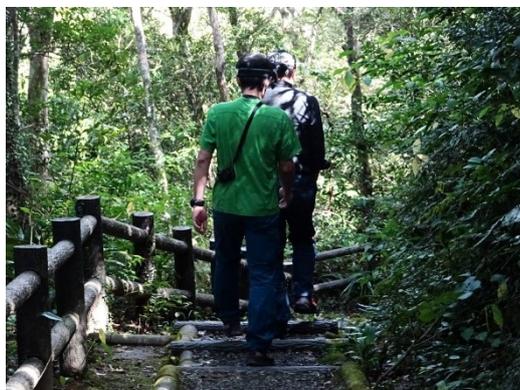
【講演会 3】



【南部ツアー（ホノホシ海岸）】



【南部ツアー（高知山展望台）】



(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- 今後のガイド活動において、ガイドに求められる役割や自然の保護と適正利用についてのアドバイスをいただき大変参考になった。
- お客様ニーズへの対応について、自然の知識を備えるだけでなく、保険や救命講習等の安全管理も重要であることの認識が持てた。
- お客様の満足度をいかに高められるか、他のガイドや地域との連携がいかに大事か理解できた。

2) 今後、期待される効果

- お客様のニーズの把握と共にガイドのスキルにより、フィールドの使い分けをすることで利用の分散がされ、自然環境の保全・維持に寄与することが期待される。
- ガイドが地域との架け橋となり、地域のおみやげ店や拠点となる施設に立ち寄ることで地域振興・地域活性化に繋がることを期待される。
- ごみの不法投棄や外来種対策等、地域の環境保全について責任を持って活動するガイドが多くいることで、地域住民の意識の向上に繋がることを期待される。

3) 今後の取り組み

- 環境保全・観光振興・地域振興のバランスの取れた発展を目指す奄美群島では、国立公園の指定やエコツアーリズム推進全体構想の認定、エコツアーガイド認定制度の策定など、エコツアーリズムを推進する体制が順調に整ってきているが、エコツアーガイドが果たす役割は非常に大きいと考えられる。豊かな自然や多様な文化の魅力を多くの人に体験してもらい、多くの方が保全の重要性を感じてもらい取り組みに期待したい。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- 防災マニュアル・防災マップの作成（山小屋や防災ヘリとの連携）
- ガイドの影響力は強い（おみやげ選び、食事場所等）
- モニタリングによって、次年度の対策を考えることができる
- 利用調整における環境収容力の考え方（混雑する日は年間ごくわずか）

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

安類 智仁氏 (NPO 法人片品・山と森の学校)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

奄美群島は、鹿児島県本土と沖縄の中間に位置する有人 8 島の総称で、奄美大島の面積約 720 平方キロメートルは沖縄本島、佐渡島に次ぐ大きさである。かつては大陸の一部だったが、約 200 万年前に大陸から切り離され、独自の生態系や固有種が遺されてきたと考えられている。こうした固有種が生息・生育地する亜熱帯照葉樹林や美しい海岸景観、島毎に特徴的な自然環境を持つことから、奄美・琉球は平成 15 年に世界自然遺産候補地となり、平成 29 年 3 月 7 日には奄美群島国立公園として指定され、急ピッチで世界自然遺産への登録を目指している。

このため環境省、鹿児島県、市町村、奄美群島広域事務組合等の行政機関を中心に、遺産登録に向けた調査・協議・調整が進められている。とりわけ奄美群島広域事務組合は、「奄美大島エコツアーガイド連絡協議会」と「(島毎の) エコツーリズム推進協議会」の事務局として、同ツーリズム牽引の中心的役割を果たしている。

また、平成 29 年 2 月 15 日には推進法に基づく全体構想が認定され、奄美群島での「奄美群島エコツアーガイド認定制度」の運営と、ガイド育成が本格的に始まろうとしている。現状では「(島毎の) エコツーリズム推進協議会」に所属するガイドを対象に(登録ガイド)、一定の要件と 3.5 日間の研修を経て奄美群島認定ガイド(認定ガイド)となる 2 段階の制度を設けている。

②課題

湯湾岳や金作原などでの希少植物の盗掘、ナイトハイク中のアマミノクロウサギのロードキル、ノネコの脅威といった資源管理の面での課題が散見されるなか、希少種保護目的のパトロール、ナイトハイク中の運転マナー指導の徹底、必要に応じた施設整備等のソフト・ハード両面の対策が十分ではない。マングース対策には手厚い体制が取られているが、新たな課題に対応する柔軟性が求められている。

ガイドの活動は現地の特性を活かしたツアープログラムが企画されているが、営業や販路、また料金設定やリピートさせる工夫といった業として安定させる取り組みが必要である。こうした点はガイド認定制度の運営とともに、認定ガイドの周知を図る活動が必要である。

また、国立公園指定と世界自然遺産登録といったニュースが広く流れることで、今後は団体旅行客の増加が見込まれるが、こうした受け皿となる拠点整備と、残すべき原生自然エリアの立ち入り規制などの受入れ体制を整える必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

奄美群島は固有種・希少種の宝庫であるが、特筆すべきはそれらの動植物と人間との距離感の近さにあると感じた。湯湾岳の歩道を歩けば、その路傍に多くの固有種が見られ、鳴き交う野鳥たちは世界中の野鳥愛好家が集まるような希少種ばかりである。この他にも住用湾に広がるマングローブ原生林、宇検村の湯湾沢周辺に広がるオオタニワタリ群生地、加計呂麻島の数々の手つかずのビーチなど、どれを取っても国内でも一級品の自然が広がっている。

こうした自然度の高さと人間との距離感は、国内でも奄美群島が群を抜いていると感じた。自然体験を求める旅行者にとって手に取る近さに本物の自然がある事は、何よりも好まれるだろう。今後は「見たら分かる」旅行者任せの観光だけでなく、認定ガイドを中心に「見えないものを解き明かす」きっかけを作れば、より奄美群島の価値は深まっていくと思われる。

今回の派遣期間中には、奄美群島の特殊性を現地ガイドのみなさんが熱く語る様子や、それらの資源を大切にしようとする姿勢にも、ガイド本来が持つ人間的な魅力を感じることができた。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

昨年の派遣報告書と同様になってしまうが、奄美群島の魅力は無理な施設整備を行わず、その場の雰囲気大切にしている点にあると感じている。今回の国立公園指定、来年夏の世界自然遺産登録に向けて観光客の受入体制づくりが急ピッチで進められると思われるが、受け皿となる利用拠点と自然の核心部とが一律整備とならないよう、その場の雰囲気を大切にしてもらいたいと思う。

3) アドバイス（講義等）の概要

○湯湾岳散策

- ・交通規制について
- ・散策路の施設整備方法
- ・山頂一帯の立ち入り規制

○講演会「エコツアーガイドの役割とは？」

- ・尾瀬国立公園の概要
- ・尾瀬認定ガイド制度の概要
- ・尾瀬認定ガイドを依頼するメリット
- ・尾瀬認定ガイドの活動風景（団体客の場合、個人客の場合、教育旅行の場合）
- ・自然環境のモニタリング
- ・安全対策（主に傷病事故発生時の対応）
- ・地域とお客さまを結ぶ
- ・地域プロデューサーとしての役割
- ・ガイドのレベルアップ方法
- ・尾瀬での保護活動事例紹介（クマ保護管理、ゾーニング、マイカー規制、植生復元、排水対策、入山規制、環境収容力）
- ・関連法規（自然公園法）

○大島南部視察

- ・湯湾沢のオオタニワタリ群生地保護

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

※当地は平成 29 年 2 月 15 日に全体構想が認定された。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

当地への 2 回目のアドバイザー派遣であったが、前回と同様にその自然度の高さと保存状態、人間との距離感について圧倒された毎日であった。前回は訪問することのできなかった加計呂麻島や徳之島、そして沖永良部島を訪ねることもでき、大島と全く異なる自然環境と生活様式があることを知り、群島の自然史的背景や人間の歴史を肌で感じる事ができた。ここで生活する方々の自然との付き合い方が、結果として良い雰囲気を残しているのだと思う。今後は国立公園と世界自然遺産効果によって、数多くの旅行者で賑わうと思われる。自然を切り売るような受入れ方は論外だが、一過性の観光客だからと出し惜しみせず、一人でも多くの方に奄美群島の魅力を伝え、多くのファンを作る努力を行ってほしい。

来年夏の世界自然遺産登録を目指しての関係者のご努力は想像をはるかに越えるものだろう。しかし世界自然遺産登録をゴールとせず、物言えぬ自然の立場を常に尊重しながら、継続的な運営を行っていただくことを願っている。

1-4-9. 徳之島町企画課（鹿児島県徳之島町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 25,396 人（徳之島三町）

【面積】 247.85km²

【地勢】

徳之島は中部から北部が山地で、その周囲の南部から西部にかけては低平な斜面が広く分布しており、海成段丘がよく発達する。

山地の周囲を取り囲むなだらかな地域には、基盤岩のほか、標高210m以下には主に中期更新世の堆積岩（サンゴ礁複合体堆積物）が分布する。

【気候、自然】

亜熱帯気候に属する。近傍を流れる暖流の黒潮とモンスーンが大きく影響して年間降水量は2000mm以上に達する。そのため、亜熱帯域に多雨林が発達し、特異的な地域である。

【歴史】

古くには琉球王朝に統治されていたが、島津藩の侵略により島津藩の領土となる。昭和 20 年にはアメリカ軍の侵略により米軍の統治下となる。昭和 28 年 12 月日米交渉により奄美群島が本土に復帰し、鹿児島県に編入される。

【観光】

犬田布岬、犬之門蓋等の自然景観地に加え、ソテツトンネルや畦プリンスビーチなど風景探勝等による島内周遊利用が多い。また、400 年以上前から島内にて行われている闘牛も大きな観光資源となっている。

【地域資源の概要】

徳之島では昭和 30 年代に減反政策の施行により、稲作からサトウキビへ転作が進められ、島内での田んぼは一部を残し消失した。田んぼは、水生生物にとっては貴重な生息環境であり、田んぼの消失によりさまざまな生きものが姿を消した。そのような中、徳之島町井之川集落では、平成 29 年度に集落と自治体が共同で田んぼの復活プロジェクトを計画している。そこで、田んぼを環境教育のフィールドと捉え、動物や植物が恒常的に生活できるよう復元された小規模な生活空間（ビオトープ）を形成し、季節ごとの生物相の違いや水のろ過作用などを学ぶ場として活用する。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

徳之島を含む奄美群島は、国内最大規模の亜熱帯照葉樹林やアマミノクロウサギをはじめとする固有又は希少動植物の宝庫となっており、これらが評価され、平成 29 年 3 月 7 日 奄美群島国立公園が誕生し、平成 30 年夏「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」世界自然遺産登録に向け環境配慮型の公共事業の施行等さまざまな事業が展開されている。

観光においてはエコツアーガイドの養成や滞在型観光メニューの検討がされており、島外客への対処について行政や民間が一体となった取り組みが進められている。しかしながら、地域に住む住民が地域の良さを理解していない現状があることから、小学校での総合的な学習の時間を活かした環境教育等、地域の自然を身近に感じられ保護・保全に向けてのプログラムの構築作りのため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を活用させていただいた。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 24 日（金）～平成 29 年 3 月 26 日（日）
場 所	徳之島町井之川集落
アドバイザー	川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）
参 加 者	計 9 名 徳之島町役場 企画課（係長・主事）3 名 徳之島エコツアーガイド受講者 3 名 徳之島町文化協会会長 1 名 徳之島町文化協会会員 1 名 鹿児島県自然保護推進員 1 名
スケジュール・方法	【1 日目】 午前・午後：移動 【2 日目】 午前 10：00～12：00 まち歩き、田んぼ（2カ所）視察 午後 13：30～14：00 参加者からの意見聴取 14：00～16：30 川嶋様よりご講演 ・環境教育の事例 ・フィールドでのアイスブレイク 質疑応答 【3 日目】 午前・午後：移動

(3) アドバイスの内容（議事録）

午前中に行った現地視察では、今回の視察対象集落出身者の方から集落の歴史・成り立ちをガイド説明し、その説明内容について下記のアドバイスをいただいた。

- ・参加者に知っている情報を伝えるだけでなく、参加者の表情などを伺いながら求めている情報を引き出すのもガイドの仕事。
- ・全て言葉で伝えようとする、受け取り側は覚えきれない。パネルなど視覚を使った表現を加えることで、参加者の知識量は高まり、さらに深い情報を理解する等の効果が見込める。

午後の部では、参加者のエコツアーガイドの方法やその悩みについての意見聴取後、全体の講義があった。

講義では、川嶋氏が以前勤めていた山梨県にあるキープ協会の成り立ちや身近にある環境を活用した参加者の年齢・職種を問わないアイスブレイク方法を学んだ。



ガイドによる集落案内



田んぼの視察



午後の講義



午後の講義

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

まち歩きの際の注意点や表現方法、効果的な伝え方を学び、参加者は熱心にメモを取っていた。中でも、学んだ知識を全て伝えるのではなく、相手の表情やレベルに合わせてガイド方法を変え、相手の知っている情報を聞き出すことが相手の満足度を高めるとの意見は、大変勉強になった。

2) 今後、期待される効果

今回学んだアイスブレイク方法は、さまざまなフィールドで行えることから、海や川、森林でのガイドにおいて活用されることが期待される。また、田んぼ視察の際に、昭和 40 年頃まで徳之島では集落ごとに「田植え唄」が存在していたことから、田植え体験のみならず、「全島田植え大会」の開催について提言をいただいた。参加していた徳之島町文化協会会長は、実現に向け取り組みたいと述べた。

3) 今後の取り組み

町では、平成 29 年度に今回の視察地域である井之川集落において「遊休農地の田んぼ復活プロジェクト」を計画しており、上記に示した「全島田植え大会」の開催は町おこしにも期待されることから、住民・集落を巻き込んだエコツーリズムの推進に取り組む。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事例、その感想

1) 参考となった事項

アドバイス内容にもあるように、身近にある環境を活用した参加者の年齢・職種を問わないアイスブレイク方法は、エコツアーガイドを目指す参加者にとっては非常に良い内容でした。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）

1) 地域における取り組みの現状と課題

①取り組みの現状

徳之島へは昨年に引き続き「環境省エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」としては2年連続の訪問だ。昨年は天城町からの声掛けで訪問し、今年は徳之島町からのお声掛けの訪問だった。

徳之島はエコツーリズムについては、取組をはじめた間もない始動期にあたり、奄美群島広域事務組合を主体に、奄美群島全体でエコツアーガイドの養成講座が進められているとのことだった。エコツアーガイドの養成講座では、エコツーリズムの基本理念の説明、リスクマネジメントや救急救命の講習を学び、フィールドでのプログラム作りを取り組んでいるという。今回もこの講座の参加者が「井之川集落」のまち歩きに数人参加されていた。

今回の視察では、徳之島のエコツアーガイド・集落関係者と共に「井之川」の集落を歩きながら地域の資源の説明を受けた。

②課題

エコツーリズムの推進にあたって、中心となる組織が不存在となっており、上記の講座を受けた方が宙に浮いた状態となっているという問題があるようだった。講座修了者からも「実際に観光客の方が『徳之島のガイドをして欲しい』と思っても、一体どこに問い合わせたらいいのか、その問い合わせ先が現状ではない。」「私（講座を受講したガイド）はパソコンをしないので、観光客からのガイドの依頼はうちの電話にかかってくるのか？それではとても対応できない」との声が聞かれた。

ガイドの養成もようやく始まったばかり、島の観光資源の整理・整備もこれから、こうした資源とガイドを結びつけて「エコツアー」という商品にするにはもう少し時間が必要と感じた。

ただ、国立公園の指定を終え、世界遺産の登録を控えている徳之島にしてみれば、早く上記のような「準備」を進めないと、観光客が大量に押し寄せてからでは遅いのではないかという焦りを感じている方もいるようだった。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

徳之島では、昭和30年代中頃から稲作から畑作へ転換され、サトウキビが主幹作物となり、米作をおこなう田んぼの景色はほぼ姿を消した。稲作の時代には各集落に「田植え唄」が唄われており、集落ごとに異なる唄い方があったと言う。徳之島町では平成29年度には今回視察先であった井之川集落において、集落や学校、大学と連携した「田んぼ復活プロジェクト」を予定しているとのこと。この復活された田んぼを使って、徳之島の各集落の田植え歌が集まる「田植え歌祭り」のようなイベントの開催が期待される。

また、今回最終日に案内された徳之島の東側海岸（亀津集落から井之川集落まで）を見下ろす高台（携帯電話の電波塔建設のために整備された場所）からの眺望は実に素晴らしいもので、この素晴らしい場所のことを島の住民の方たちも多くは知らないとのことだった。この高台に至る道も車1台の通行がやっとの細い道で、大きなガラス窓のサンルーフ付きのワゴン車などでこの道を行くだけでもディズニーランドのジャグルクローズのように結構「冒険」している気分になれる素敵な資源だった。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

上記にも書いたが、この素敵な資源（自分たちの町を見下ろす高台とそこに至るスリリングな道）の存在を地元の人たちが殆ど知らない（あるいは、興味がない）ことが大事なポイントだと思った。

今回の派遣事業を担当された米山さんも、この担当をするまでこの高台と道の存在は知らなかったとのこと。地域の資源を地域に住む人たちが知らないということ、これは問題でもあり、反面まだまだ可能性が隠されているのではないかと思わせる事実だった。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ エコツーリズムの推進にあたり、行政・事業者・ガイドなどがそれぞれの役割を整理し、それぞれ何ができるかを考え、関係者でプログラム（旅行商品）を練り上げることで可能性が見えてくるのではないかと。
- ・ ガイドとして歴史・文化・自然などの知識を、一方的に話し言葉だけで伝えるのではなく、お客様の情報を聞き出してやり取りをしたり、言葉やイラスト・写真などパネルを使って見せながらガイドを行うことなどの「見せる工夫」が必要。
- ・ スライドにより山梨県清里で環境教育事業を行ってきたキープ協会の成り立ち・収支状況などを紹介。
- ・ 同時にキープ協会で行われていた、身近な森林を活かした手頃で参加者の年齢を問わないフィールドの活用方法（体験アクティビティ）の紹介。
- ・ キープ協会の例では、鏡やシールなど、簡単な小道具を使いながら「自然を違った角度から見てみる」という提案をしている。こうした「視点を変える」という作業は、なんとなく見ている自然が、全く違う見え方によって輝いて見えるという「視点の変化」を生み、お客様（体験プログラムの参加者）はそのことで大いに驚き感激する。その驚きが訪問地の印象として後々まで記憶に残っていく。
- ・ 徳之島の森は魅力的だがハブがいることから安易に入ることが難しいのであれば、海岸で出来ることは山ほどあるだろう。夜の砂浜で満天の星を眺めながら寝転び、波の音に耳を傾ける。必要なのは身体の大きさの布一枚（出来れば防水布）だけ。この布一枚で砂で衣類を汚すこともなく、雨の直後でも衣類を濡らすこと無く安心して寝転ぶことが出来る。たった布一枚の用意でその場が素晴らしい場＝「自然を五感で感じる特等席」に変えることが出来る。こうした「体験を助ける小道具」の開発（発見）は全国各地の事例から学ぶことも出来るし、勿論自分たちで開催するワークショップから生まれてくることもあるだろう。
- ・ こうした手法は「インタープリテーション」と呼び、知識を一方的に伝えるのではなく、参加者に伝わりやすいように、（小道具を使ったり、視点を変えてみたり）様々な工夫をして伝えるということを大事にしている。
- ・ 徳之島にはフィールドが身近に存在することから、様々なエコツーリズムの展開が可能であり、多くの関係者でこの島でしか得られないエコツーリズムを作り上げて頂きたい。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

すでに奄美地方全体で認定への取組みを始めている。（始動期）

②全体構想策定への意向について

（上記）

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

従来の希少な生き物を紹介するという考えだけではなく、森林や海に触れ感じて頂けるガイドプログラムの構築。徳之島3町の一層の連携。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

昨年、今年と2年連続で徳之島を訪れたが小さな島にも関わらず2年間で出会った方が一人もダブらなかった。もう少し島内3町（徳之島町、天城町、伊仙町）の連携を良くしないと「エコツーリズムの島」としての全体の魅力をアピールするのが難しいのではないかと考えた。

また、徳之島は現時点ではまだ殆ど観光産業が成立していないように見受けられ「最初の観光産業がエコツーリズム」という幸せな観光業との出会い方が出来る島なのかと思った。マスツーリズムをエコツーリズムにと、チカライッパイ舵を切るのではなく、最初からエコツーリズムのお客様を開拓し迎えることが出来るのだからそれはそれで幸せなのではないかと思った。

1-4-10. NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県竹富町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】約 2,400 人

【面積】289.61 km²

【地勢】

島の 90%以上が亜熱帯の自然林で覆われている。平地が少なく、海岸線のわずかな土地に人が居住する。沖縄県内でも標高の高い古見岳（469.5m）などの山々、県内最長の河川である浦内川を有している。島の周囲はサンゴ礁に囲まれている。

【気候、自然】

亜熱帯海洋性気候に属し、年間を通して温暖で、降水量が多い。島のほとんどは亜熱帯照葉樹林で覆われ、海岸線や河口域には日本最大級のマングローブ林が発達する。国の特別天然記念物に指定されているイリオモテヤマネコをはじめとする希少な動植物が多数存在し、独自の生態系が築かれている。

【歴史】

かつてはマラリアの発生により定住が困難な地ではあったが、500 年以上の歴史を持つ集落も存在する。19 世紀後半までは琉球王朝に統治されていた。大正から昭和初期にかけては、炭鉱採掘が盛んであった。古くからの集落に加えて、戦後の政府の移住政策による周辺の島々からの移住民が興した開拓集落が、現在の西表島を形成している。

【観光】

西表島への入域観光客数はピーク時の 2007 年で 40 万人に達しており、近年は 34 万～39 万人程度となっている。その多くは石垣島からの日帰りの団体客であるが、自然体験を目的とした個人客も 20 年ほどの間に急増している。マングローブに囲まれた河川での遊覧船やカヌー・トレッキングツアーが非常に盛んである。

【地域資源の概要】

- ・ マングローブ等の亜熱帯性植物
- ・ 亜熱帯林と滝などの地形
- ・ イリオモテヤマネコを始めとする固有・稀少生物
- ・ サンゴ礁域とそこに生息する多種多様の海洋生物
- ・ 染織物・民具などの生活文化
- ・ 舞踊・民謡などの民俗芸能
- ・ 稲作とそれに関連する風俗習慣、祭事、食文化

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

・背景

1990年代にエコツーリズムの理念をいち早く取り入れ、日本のエコツーリズムの先進地区として注目を浴びた西表島は、西表島エコツーリズム協会（以下協会）の設立から今年でちょうど20年を迎える。この20年余りの間に、西表島の自然体験型観光は、当初の予想以上に発展・拡大をしている。

近年は、西表島を含む「奄美・琉球」の世界自然遺産登録に向けて、西表森林生態系保護地域や西表石垣国立公園が拡張されるなど、行政の動きが加速している。一方で、増加の一途をたどる観光によるフィールド利用に関しては、利用実態の把握やルールの整備が遅れていることが危惧されている。

・地域課題

平成25年3月の新石垣空港の開港以降、八重山全体の入域観光客数は好調な伸びをみせているが、実際に西表島にもたらされたのは、主に石垣島からの「日帰り」観光客の増加で、島に及ぼす経済効果は限定的である。日帰りでも手軽に大自然の中でのカヌーやトレッキングが楽しめるとあって、近年、日帰りツアーの需要が高まり、ツアー事業者の増加に歯止めがかからない一因ともなっている。

現在、ツアー事業者数は陸域のカヌー・トレッキングツアーを提供する事業者のみでも80以上にまで増え、利用フィールドも年々拡がりをみせている。現状のまま世界自然遺産に登録されて観光客が押し寄せた場合に、環境への負荷や地域住民の生活への影響が心配される。

ガイド認定制度の導入やゾーニング、利用と保全のルールや仕組みづくりの必要性は、以前から提唱されているが、実現には至っていない。

・これまでの取り組み

協会では、1996年度の設立以来、エコツーリズムガイドブックの発行、エコツーリズムガイドラインの作成、ガイド養成事業など、様々な形でエコツーリズムの推進に取り組んできた。しかし、西表島における急速な自然体験型観光の拡大に追いついていくことができず、エコツーリズムの浸透は未だ限定的である。

今年度より、新たな取り組みとして、竹富町ならびに竹富町観光協会と連携したルールづくりに向けた検討事業が、ようやく本格的に動き出した。その中で、協会が、事業者、行政機関双方からの大きな信頼を得つつあり、その調整役を担える島で唯一の機関という立場を確立しつつある。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 18 日（土）～平成 29 年 3 月 21 日（火）
場 所	<p>視察場所：島内のエコツアーフィールド、エコツアーリズム関連施設 （ヒナイ川・マーレ川周辺、浦内川周辺、西表島エコツアーリズムセンターなど）</p> <p>・講演会実施会場：浦内公民館</p>
アドバイザー	北海道大学 観光学高等研究センター 特任教授
参 加 者	<ul style="list-style-type: none"> ・島内視察／意見交換参加者 計 11 名 <ul style="list-style-type: none"> 竹富町観光協会西表世界自然遺産研究委員会 環境省西表自然保護官事務所 自然保護官 西表島エコツアーリズム協会 会長 西表島エコツアーリズム協会 役員（ツアー事業者含む）3 名 西表島エコツアーリズム協会 会員（ツアー事業者含む）5 名 ・講演会参加者 計 19 名 <ul style="list-style-type: none"> 環境省西表自然保護官事務所 自然保護官 環境省西表自然保護官事務所 職員 1 名 西表島エコツアーリズム協会 会長 西表島エコツアーリズム協会 役員（ツアー事業者含む）4 名 西表島エコツアーリズム協会 会員（ツアー事業者含む）5 名 ツアー事業者 4 名 団体職員 1 名 その他地域住民 2 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】 9：00～12：00 島内視察（仲間川周辺、前良川・後良川周辺など） ※アドバイザーの体調不良により中止 13：00～17：00 島内視察（マーレ川周辺、浦内川周辺など） 19：00～21：00 地域関係者との懇親会（エコツアーリズムセンター）</p> <p>【2 日目】 9：00～12：00 地域関係者との意見交換 14：00～17：00 うちあわせ・講演会準備 19：30～21：00 講演会</p> <p>【3 日目】 9：30～ 移動</p> <p><u>アドバイス実施方法</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>地域関係者との意見交換会</u> <p>現在のエコツアーリズム推進状況、フィールド利用の実態などの課題を地域関係者と共有する上で、西表島の現在の自然の利用上状況や問題点を踏まえて、今後のルールづくりの進め方・手法を探る為の、自由な意見交換を行った。</p>

・講演会

「世界自然遺産を考える～海外のエコツーリズム・エコツーリズム推進法の導入事例から～」と題して、真板氏が関わってこられたガラパゴスでの事例や、エコツーリズム推進法の導入事例を紹介いただき、世界自然遺産登録に向けての活用の可能性と必要性について講演をしていただいた。

(3) アドバイスの内容（議事録）

・地域関係者との意見交換会

意見交換会においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についての詳しい説明があった。さらに、全体構想におけるルールやガイドラインの例を参照して、具体的な内容についての解説があり、また、ロードマップを用いてのエコツーリズムを軸としたまちづくりのアドバイスがあった。これらに関する参加者の質問に対しては、丁寧に回答いただいた。

・講義の概略

講義においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についてパワーポイントを用いて詳しい説明があった。また世界遺産登録を控えていることから、全体構想策定と世界遺産認定との関係、全体構想が世界遺産登録後にどのような効果をもたらすのか、逆に世界遺産後の社会変化を予測した時、全体構想で西表島の現状をふまえて、是非とも論議しておかなければならない内容について詳しい説明があった。この世界遺産登録後に起こると予想される様々な社会や自然へのインパクトとその取り組みの「百の成功百の失敗」と題した事例として、世界自然遺産第一号のガラパゴス諸島における 1976 年からの軌跡について講義を頂いた。

・視察

現地視察においては、今問題となっているカヌーの過剰利用と河川等への放置の現状を中心に視察した。



視察（浦内川のカヌー放置現場）



視察（マーレ川カヌー置き場）



意見交換会



講演会

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

○一般参加者、ガイド事業者への効果

- ・「エコツーリズム推進法」について、一から学び、理解を深めることができた。
- ・曖昧なイメージを持っていた「エコツーリズム」に関する理解を深めたり、改めて考え直すことができた。
- ・地域住民と観光客をつなぎ合わせる意味の解釈が、今後の業務におけるヒントとなった。
- ・海外（ガラパゴス）の事例から、西表島において今後何をすべきなのか考えるきっかけとなった。

○関係者への効果

- ・行政機関（竹富町）が初めてエコツーリズム推進法の導入を本格的に検討し始めた中で、関係する人たちが、そのプロセス等を学べたことで、導入に向けての具体的なイメージを持つことができた。
- ・海外（ガラパゴス）の事例から、現在進行形で時代と共にその状況に応じた検討・対策がされていることを知り、保全と利用のバランスを保ち続けるためには、世界遺産登録の前後だけではなく、常に行政・民間の協議が必要であることを認識した。

2) 今後、期待される効果

- ・理解が深まったことで、エコツーリズム推進協議会の設立に向けての動きが加速することが期待される。
- ・行政機関（竹富町）の具体的な取り組みと同時に、民間の組織においてもそれぞれが問題を認識し、対策が進められていくことが期待される。
- ・今後は、多様な主体の連携がしっかりと図られていくことが期待される。

3) 今後の取り組み

- ・世界遺産登録に関する情報が依然不足していると感じるため、今後も継続して地域住民が勉強できる機会を設けていき、その中でエコツーリズムの重要性をより多くの住民に知っていただきたい。
- ・竹富町ならびに竹富町観光協会と連携してのルールづくりに向けた検討事業に継続して取り組み、世界遺産登録前に可能な限りの準備をしていく。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

ようやく本格的にエコツーリズム推進法の導入が検討されようという中で、協議会の立ち上げから、認定に向けたプロセスに関して、様々な事例と共にアドバイスをいただいたことは、非常に参考になり、具体像を得ることができた。

また、海外（ガラパゴス）の事例は、関係者や多くの参加者にとって非常に興味深く、印象的であった。

長年取り組んできている「エコツーリズム」の普及啓発に関しては、今回の講演で理解が深まったという声も多く、普及啓発の手法も参考となった。

2) その他感想

20年以上前の協会の設立に多いにご尽力いただいた、アドバイザーの真板氏を、知っている世代とそうでない世代が、今回の派遣を機に、共通の認識を持ち、今後世代を越えての協働体制を取るきっかけとなったのではないかと思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板昭夫氏（北海道大学 観光学高等研究センター 特任教授）

1) 地域における取り組みの現状と課題

①現状の取組

協会では、1996年度の設立以来、エコツーリズムガイドブックの発行、エコツーリズムガイドラインの作成、ガイド養成事業など様々な形でエコツーリズムの推進に取り組んできた。しかし、西表島における急速な自然体験型観光の拡大に追いついていくことができずエコツーリズムの浸透は未だ限定的である。今年度より、新たな取り組みとして竹富町ならびに竹富町観光協会と連携して選定地域用のルールづくりに向けた検討事業がようやく本格的に動き出した。その中で、協会が、事業者、行政機関双方からの大きな信頼を得つつあり、その調整役を担える島で唯一の機関という立場を確立しつつある。

②課題

竹富町行政が世界遺産指定への取り組みをきっかけとして、行政内にその指定後の自然環境や社会環境へのインパクトを予測し、どの様にその課題を事前に設定し、解決するための仕組みづくりを全体構想で設定できるかが最大の課題である。さもないと、近年の急激な日帰り観光客の増加とカヌー業者の増加、船艇のマングローブ林や海岸での無法な放置状態はさらに悪化すると予想される。このため対応としては林地の所有者で登録制を規則化しながら放置されている林野庁との話し合いと管理システムの再構築は急務である。またガイドによるまちまちな自然利用を整理し、ガイドラインの設定とルール化を行い、コントロールしていく実施体制の確立は急務である。これに向けては、特に竹富町、環境省、林野庁の3者による事前の話し合いと合意による実効性のあるガイドライン設定は急務である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

西表島は歴史、文化、自然、いずれをとっても特一級であり、その優劣はない。

3) アドバイス（講義等）の概要

講義においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についてパワーポイントを用いて説明した。また世界遺産登録を控えていることから、全体構想策定と世界遺産認定との関係、全体構想が世界遺産登録後にどのような効果をもたらすのか、逆に世界遺産後の社会変化を予測したとき、西表島の現状をふまえて、是非とも全体構想で論議しておかなければならない内容について詳しい説明を行った。この世界遺産登録後に起こると予想される様々な社会や自然へのインパクトとその取り組みの「百の成功百の失敗」と題した事例として、世界自然遺産第一号のガラパゴス諸島における1976年からの軌跡についても講義を行った。そして危機遺産からいかに脱却し、人と自然が一体となったどのような社会システム「ソーシャルエコロジカルシステム」を構築しようとしているのかを説明した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

竹富町として初めて担当をおき、取り組みのタイムスケジュールの検討を行うようになって来ている。

②全体構想策定への意向について

世界遺産指定を受けるにあたって、全体構想づくりの必要性は認めているものの、町役場全体の中で十分に浸透しているとは言えない部分もある。ただ観光協会とも連携しながら進める準備も見られている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

世界遺産との関係性を一般住民へ何回も説明していく必要性を感じる。そのため、世界遺産の意義、その為の全体構想の役割と必要性を様々な手段を用いて住民に情報共有していく作業が必要と思われる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

日本で最初にエコツーリズム協会を設立した地域が西表島である。いま西表島は 1996 年の設立から 20 年経過し千五百人前後の人口から二千数百人にもなり、それなりに自然体験型のツアー実施のエコツーリズム先進地としてイメージは定着して来た。しかしその一方で自然や歴史文化を観光の一方的な商品として消費しようとする外部からの観光業者も増えて、地域性が無視され混乱が生じているのも事実である。いま西表島エコツーリズム協会は設立当時から見ても第 2 世代を迎えており、確実な世代交代が進んでいる。この意味で、世界自然遺産指定への取り組み、エコツーリズム全体構想への取り組みと推進協議会の設置によって、島の歴史と文化、そして自然が融合したエコツーリズムに取り組むガラパゴス第 5 次公園計画で始めたような「ソーシャルエコロジカルシステム」の確立に取り組む第一号の先進地モデル、世界モデルとして発展してほしいと思う。